

令和 7 年度

上川農業試験場年報

令和 8 年 1 0 月

地方独立行政法人北海道立総合研究機構 農業研究本部

上 川 農 業 試 験 場

目 次

I 概 要	1
1. 沿 革	1
2. 施設及び試験圃場	1
3. 機 構	2
4. 職員の配置	3
5. 職 員	3
1) 現在員	3
2) 転入者	3
3) 転出者及び退職者	4
6. 支出決算額	4
7. 新たに設置した主要施設及び備品	4
II 作 況	5
1. 気象概況	5
2. 作 況	7
1) 各作物の耕種概要	7
2) 各作物の作況	7
(1) 水 稻	7
(2) 秋まき小麦	9
(3) 春まき小麦	10
(4) 大 豆	11
(5) 小 豆	12
(6) ばれいしょ	13
III 試験研究及び地域支援活動	14
1. 各グループの試験研究成果及び地域支援活動等の概要	14
1) 水稻畑作グループ	14
2) 生産技術グループ	14
2. 各グループの試験研究課題	15
1) 水稻畑作グループ	15
2) 生産技術グループ	17
3. 地域支援活動	19
1) 地域農業技術支援会議	19
2) 道北地域農業技術センター連絡協議会（NATEC）	19
3) 上川水稻直播ネットワーク	19

IV	試験研究の成果と普及	20
1.	技術普及に移された成果	20
1)	普及奨励事項	20
2)	普及推進事項	20
3)	指導参考事項	20
4)	研究参考事項および行政参考事項	20
2.	論文ならびに資料	21
1)	研究論文、試験成績	21
2)	口頭・ポスター発表	22
3)	専門雑誌、著書・資料	22
4)	新聞等記事	22
5)	印刷刊行物	23
3.	研修生の受入	23
1)	普及指導員研修	23
2)	学校教育研修・職場体験学習	23
3)	JICA 研修	23
4)	その他	23
4.	技術相談及び技術指導	23
1)	技術相談	23
2)	技術指導	25
5.	講師等の派遣	26
6.	関連委員会・学会研究会役員	26
V	広報・場運営・その他	27
1.	広 報	27
1)	一般参観来場者	27
2)	公開デー	27
3)	新技術発表会	27
4)	マスコミ等への対応	27
5)	イベント等への出展	28
2.	場運営	28
1)	場内委員会	28
2)	諸会議	28
3)	職員の研修	29
4)	表彰および学位授与	30
3.	自己点検への対応	31

I 概 要

1. 沿 革

当場は、明治 19 年に旧神居村忠別（現旭川市神居 1 条 1 丁目）に忠別農作試験所として発足し農作物栽培の適否を試みたのを始めとする。この試験所は、翌年上川仮道路開削に従事する樺戸集治監忠別出張所に引き継がれた。明治 22 年道庁は屯田兵及び移住民に蚕桑の業を授け、かたわら農作物を試作する忠別農作試験所（現旭川市 1 条 2、3 丁目）を復活した。明治 30 年に旭川村 6 条 11 丁目（現旭川東高校敷地）に、さらに明治 37 年には旭川の市街拡張のため永山村（現旭川市永山 6 条 18 丁目）に移転し、平成 5 年度末までの 90 年間にわたって各種の試験を行った。翌平成 6 年度からは現在地（上川郡比布町南 1 線 5 号）の新庁舎、新圃場での試験を開始した。

長い歴史の間に名称や機構も変遷し、昭和 25 年には農業試験研究機関の整備統合で、従来の試験研究が国立と道立に二分されたのに伴い、当場は道費支弁の北海道農業試験場上川支場となり、さらに昭和 39 年 11 月、本道の農畜一体とした試験研究を行うため機構改革が実施され、当場は北海道立上川農業試験場と改称された。

試験業務については、従来の蚕桑中心の試験から明治 27 年には一般畑作の試験に移り、さらに明治 33 年からは水稻も取り上げられるようになった。明治 37 年永山村に移転してからは水稻に関する試験が多くなり、それらの成果は広く普及された。大正 4 年からは水稻の本格的品種改良試験が開始された。その結果、大正時代には「坊主」系統が広く栽培され、昭和 10 年に有名な「富国」ができるまで「坊主」の時代が続いた。その後、戦前戦後を通じ数多くの優良品種を育成し、名実ともに当場は本道稲作に関する中心的試験機関となった。

なお、昭和 2 年より昭和 21 年まで地方債事業として、農林省指定による水稻新品種育成試験を実施し、その後、昭和 22 年より 25 年まで札幌農事改良実験所上川試験地が併置されていた。昭和 41 年には農林省の全額助成による水稻指定試験が再度設置され、昭和 44 年には普及事業の強化にともない専門技術員が配置された。

一方、北海道立農業試験場原々種の生産事業が士

別村東山で昭和 29 年から始められ、昭和 31 年に女満別分場の廃止と同時に北海道立農業試験場原々種農場士別分場が発足した。昭和 33 年には北海道立農業試験場上川支場畑作科が併置され、畑作試験に着手した。昭和 34 年に北海道原々種農場士別分場を廃止すると共に、北海道立上川農業試験場畑作科と改称した。昭和 62 年には、農業試験研究機関の機構改正により園芸部門を強化し畑作園芸科と改称し、平成 4 年度からは畑作科と園芸科に分離し一層の強化を図った。その後、平成 5 年度末の本庁舎移転に伴い士別市の畑作科、園芸科も現在地に統合された。

本庁舎の比布町への移転整備経過は、平成元年 9 月に現在地への移転が決定され、平成 3 年度に圃場整備、平成 4 年度に庁舎及び付属施設建設工事に着手し、平成 6 年 8 月末に外構工事を含め完成した。

平成 18 年度の機構改正により天北農業試験場は廃止の上、上川農業試験場天北支場とされた。

平成 22 年 4 月には地方独立行政法人北海道立総合研究機構が発足し、22 の道立試験研究機関が移行して、当場は農業研究本部上川農業試験場となった。この機構再編ではグループ制が導入され、水稻、生産環境、地域技術の 3 グループが設置されたほか、道職員である農業改良普及員は道農政部生産振興局技術普及課に所属の上、上川農試駐在という形となり、技術普及室が置かれた。

平成 30 年 7 月、根釧農業試験場の酪農試験場への改称に伴い、天北支場は酪農試験場天北支場となった。

令和 2 年 4 月、機構再編により生産環境と地域技術の両グループが統合され、生産技術グループとなった。

令和 5 年 4 月、水稻グループが生産技術グループの畑作に係る業務の移管にともない水稻畑作グループと改称された。

2. 施設及び試験圃場

1) 位置と土壤条件

当場は、上川郡比布町の基線（国道 40 号線）と町道南 1 線、町道 5 号と 6 号に囲まれた面積約 28.5

ha の方形の用地で、その標高は 160m 前後である。中央には用地を東西に二分する形でウツペツ工場川が流れており、東方約 700m には石狩川がある。分布する土壌は褐色低地土で、一部は礫層が地表下 30～60 cm に現れる礫質褐色低地土である。試験圃場造成前の土地利用は水田、宅地、農道等であった。

試験圃場造成に当たり、農道は殆どそのままの位置で新しい農道を造成した。試験圃場は、表土部分を取り除き、水田は心土均平を、畑圃場は心土部分の厚さ 30 cm の石礫除去を行った後、表土戻しをした。

造成された試験圃場の代表的な土壌条件は、水田では細粒褐色低地土・造成相、また畑圃場は礫質褐色低地土・造成相である。

2) 施設、圃場の利用区分と面積

施設	(㎡)
庁舎	2,804
吹抜小屋	214
車庫	179
バイオテクノロジー研究棟	2,147
人工気象棟・ガラス網室	459
給油所	3
昆虫飼育実験棟	282
参観者便所	27
共同作業棟	916
共同調査棟	907
冷水田ポンプ舎	63
水田ポンプ舎	20
畑かんポンプ舎	11
農機具庫	907
外便所(2)	72
研究資材棟	907
乾燥庫	214
その他	279
施設合計	10,411

試験圃場	(ha)
水田関係	14.05
水田	9.99
(内冷水田)	1.05
農道・畦畔	2.85
用排水路	0.29
施設・用地など	0.92
畑関係	9.52
畑	7.81
農道	1.13
枠試験地	0.19
堆肥場	0.20
施設・用地など	0.15
排水路	0.04
建物敷地	4.83
用地合計	28.40

3) 土地利用及び施設・圃場の配置

(土地利用・施設・圃場の配置図)



- ① 庁舎
- ② 温室・人工気象室
- ③ 調査・作業棟
- ④ 昆虫飼育実験棟
- ⑤ 精密枠試験圃
- ⑥ 圃場内施設

3. 機 構

総務課: 予算・給与・財務、理事長印・文書の管理、自動車及び施設等の使用・管理に関することを行う。その他各グループの主管に属さないことを行う。

研究部

水稲畑作グループ: 水稲の品種育成、畑作物に関する試験研究・調査、除草剤の試験、研究及び調査を行う。作業計画、労務及び業務用諸施設の管理を行う。

生産技術グループ: 水稲の栽培及び品質、土壌肥料および土壌環境、病害虫及び園芸作物、に関する試験、研究及び調査を行う。地域農業技術の支援、農業研究情報の提供と専門技術の調査研究、開発された技術の体系化と普及定着、に関することを行う。

4. 職員の配置 (令和8年3月31日現在)

	法人職員	道派遣	再雇用	計	備 考
場 長	1			1	
研 究 部 長	1			1	
総 務 課 長		5		5	
水 稲 畑 作 G	1 0		1	1 0	
生 産 技 術 G	1 2		2	1 2	
合 計	2 4	5	3	2 9	再雇用は内数

5. 職 員

1) 現在員 (令和8年3月31日現在)

職 名	氏 名	職 名	氏 名
場 長	神 野 裕 信	研 究 主 幹	
研 究 部 長		主 査 (栽培環境)	
総 務 課 長		主 査 (園芸) (再雇用)	
主 査 (総務)		主任主査 (病虫)	
主 査 (調整)		主任主査 (地域支援)	
専 門 主 任		研 究 主 査	
技 師		研 究 主 任	
研 究 主 幹		研 究 職 員	
主 査 (水稲)		研 究 職 員	
主 査 (畑作)		研 究 職 員	
研 究 主 任		研 究 職 員	
研 究 主 任		専門研究員 (再雇用)	
研 究 職 員			
専 門 主 任			
主 任			
主 任			
主 任 (再雇用)			

2) 転入者

職 名	氏 名	発令年月日	備 考
場 長			
総 務 課 長			
主 査 (調整)			
専 門 主 任			
主 査 (畑作)			
主査 (園芸) (再雇用)			
研 究 主 任			
研 究 職 員			
主			

3) 転出者及び退職者

職 名	氏 名	発令年月日	備 考
場 長 総 務 課 長 主 査 (調 整) 技 師 主 査 (畑 作)			

6. 支出決算額

(単位：円)

科 目	当初予算額	最終予算額	決 算 額	残 額
戦 略 研 究 費	0	0	0	0
重 点 研 究 費	0	0	0	0
職 員 研 究 奨 励 費	989,000	989,000	989,000	0
経 常 研 究 費	17,933,000	17,933,000	17,889,080	43,920
研 究 開 発 推 進 費	0	0	0	0
技 術 普 及 指 導 費	222,000	235,100	235,100	0
研 究 用 備 品 整 備 費	0	4,510,000	4,510,000	0
維持管理経費(研究)	725,000	725,000	725,000	0
維持管理経費(一般)	47,912,000	47,912,000	45,570,494	2,341,506
知 的 財 産 経 費	0	0	0	0
運 営 経 費	33,974,000	34,680,680	33,931,370	749,310
共 同 研 究 費	300,000	2,300,000	2,300,000	0
国 庫 受 託 研 究 費	1,481,000	370,000	370,000	0
道 受 託 研 究 費	3,758,000	4,693,000	4,692,359	641
その他受託研究費	22,287,000	27,200,965	27,200,965	0
施設整備費補助金	0	9,020,000	9,020,000	0
施設整備費(繰越積立金)	0	0	0	0

7. 新たに設置した主要施設及び備品

品 名	型 式	数 量	金 額 (円)
カッティングミル	レッチェ SM100	1 台	2,310,000
ダブルビーム分光光度計	SHIMADZU UV-1900i	1 台	2,200,000
穀粒判別器	静岡製機 ES-5	1 台	1,529,000
乗用芝刈機	キャニコム CMX2206	1 台	985,600

Ⅱ 作 況

1. 気象概況

《令和6年（2024年）》

11月：平均気温は0.3℃高く、降水量は平年の78%、日照時間は平年の89%であった。

12月：平均気温は2.1℃低く、降水量は平年の55%、日照時間は平年の106%であった。

《令和7年（2025年）》

1月：平均気温は1.8℃高く、降水量は平年の61%、日照時間は平年の112%であった。

2月：平均気温は1.6℃高く、降水量は平年の74%、日照時間は平年の84%であった。

3月：平均気温は1.0℃低く、降水量は平年の73%、日照時間は平年の73%であった。

4月：平均気温は0.2℃高く、降水量は平年の169%、日照時間は平年の68%であった。

5月：平均気温は0.5℃高く、降水量は平年の59%、日照時間は平年の105%であった。

6月：平均気温は2.6℃高く、降水量は平年の140%、日照時間は平年の113%であった。

7月：平均気温は2.6℃高く、降水量は平年の92%、日照時間は平年の97%であった。

8月：平均気温は1.2℃高く、降水量は平年の155%、日照時間は平年の78%であった。

9月：平均気温は2.2℃高く、降水量は平年の139%、日照時間は平年の104%であった。

10月：平均気温は0.6℃低く、降水量は平年の70%、日照時間は平年の99%であった。

本年の根雪終は4月8日で平年より2日遅く、積雪期間は4日短く、耕鋤始（融雪剤散布圃場）は4月22日で平年より5日遅かった（表1）。令和6年11月から令和7年10月までの気象は表2のとおりである。

以上、農耕期間の4～10月についてまとめると、平均気温は4月、5月が平年並で、6月、7月、8月、9月、10月がそれぞれ2.6℃、2.6℃、1.2℃、2.2℃、0.6℃平年より高かった。降水量は7月が平年並で、4月、6月、8月、9月が平年の139～169%と多く、5月、10月がそれぞれ平年の59、70%と少なかった。日照時間は5月、6月、7月、9月、10月が平年並で、4月、8月がやや少なかった。

5～9月までの積算値は、平年に比べて平均気温が218.1℃高く、降水量が47.5mm多く、日照時間が26.6時間多かった（表3）。

表1 季節表

	初霜 (年.月.日)	降雪始 (年.月.日)	根雪始 (年.月.日)	根雪終 (年.月.日)	積雪期間 (日)	降雪終 (年.月.日)	耕鋤始 (年.月.日)	降雪始 (年.月.日)
本年	R6. 10. 10	R6. 10. 19	R6. 11. 29	R7. 4. 8	131	R7. 4. 30	R7. 4. 22	R7. 10. 20
平年	10. 10	10. 26	11. 23	4. 6	135	4. 24	4. 17	10. 25
比較	0	△ 7	6	2	△ 4	6	5	△ 5

注1) 本年は令和6(2024)～7(2025)年の値。

2) 根雪始、根雪終、積雪期間、耕鋤始は上川農試(比布町)の観測値。平年は過去10か年の平均値。

3) 初霜、降雪始、降雪終は旭川地方気象台による旭川市の観測値。平年は過去10か年の平均値。

4) △は、平年より“早”または“短”であることを示す。

表2 気象表（旬別）

年月 / 旬		平均気温 (°C)			最高気温 (°C)			最低気温 (°C)			降水量 (mm)			降水日数 (日)			日照時間 (hrs)		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
令和6年11月	上旬	4.3	5.0	▲0.7	8.2	9.4	▲1.2	0.7	0.8	▲0.1	20.0	34.4	▲14.4	5.0	6.3	▲1.3	15.5	23.6	▲8.1
	中旬	2.6	2.0	0.6	7.0	6.0	1.0	-2.5	-1.7	▲0.8	35.0	37.1	▲2.1	7.0	6.6	0.4	19.4	20.7	▲1.3
	下旬	0.2	-0.9	1.1	3.4	2.6	0.8	-3.2	-4.7	1.5	23.5	29.3	▲5.8	6.0	6.7	▲0.7	20.3	17.6	2.7
平均または合計		2.4	2.0	0.3	6.2	6.0	0.2	-1.7	-1.9	0.2	78.5	100.8	▲22.3	18.0	19.6	▲1.6	55.2	61.9	▲6.7
12月	上旬	-3.5	-3.1	▲0.4	-0.5	0.2	▲0.7	-7.5	-7.3	▲0.2	14.5	24.2	▲9.7	7.0	6.7	0.3	10.4	13.9	▲3.5
	中旬	-7.1	-4.9	▲2.2	-4.2	-1.6	▲2.6	-11.8	-9.4	▲2.4	19.5	24.6	▲5.1	8.0	7.4	0.6	10.2	13.3	▲3.1
	下旬	-9.8	-6.0	▲3.8	-5.6	-2.7	▲2.9	-15.1	-10.4	▲4.7	6.0	23.5	▲17.5	4.0	8.0	▲4.0	23.9	14.7	9.2
平均または合計		-6.8	-4.7	▲2.1	-3.4	-1.4	▲2.1	-11.5	-9.0	▲2.4	40.0	72.3	▲32.3	19.0	22.1	▲3.1	44.5	41.9	2.6
令和7年1月	上旬	-6.9	-7.7	0.8	-3.8	-4.0	0.2	-12.0	-13.0	1.0	14.5	15.8	▲1.3	4.0	5.8	▲1.8	13.3	16.9	▲3.6
	中旬	-7.1	-8.2	1.1	-2.6	-3.8	1.2	-13.6	-13.7	0.1	8.0	9.9	▲1.9	5.0	4.0	1.0	18.7	25.4	▲6.7
	下旬	-4.5	-8.1	3.6	0.1	-3.8	3.9	-10.3	-13.6	3.3	1.5	13.5	▲12.0	3.0	5.7	▲2.7	47.3	28.3	19.0
平均または合計		-6.2	-8.0	1.8	-2.1	-3.9	1.8	-12.0	-13.4	1.5	24.0	39.2	▲15.2	12.0	15.5	▲3.5	79.3	70.6	8.7
2月	上旬	-5.8	-9.0	3.2	-1.1	-4.3	3.2	-11.8	-15.2	3.4	2.5	10.7	▲8.2	3.0	4.9	▲1.9	21.2	30.4	▲9.2
	中旬	-5.6	-5.1	▲0.5	-2.1	-0.9	▲1.2	-10.8	-10.1	▲0.7	18.0	17.5	0.5	7.0	5.5	1.5	22.2	27.8	▲5.6
	下旬	-4.2	-6.2	2.0	0.3	-1.3	1.6	-11.3	-12.6	1.3	8.0	10.3	▲2.3	2.0	3.9	▲1.9	33.5	33.0	0.5
平均または合計		-5.2	-6.8	1.6	-1.0	-2.2	1.2	-11.3	-12.6	1.3	28.5	38.5	▲10.0	12.0	14.3	▲2.3	76.9	91.2	▲14.3
3月	上旬	-5.2	-3.2	▲2.0	0.3	1.7	▲1.4	-11.4	-9.4	▲2.0	0.5	18.9	▲18.4	1.0	4.6	▲3.6	52.8	39.4	13.4
	中旬	-1.2	-0.8	▲0.4	3.3	4.1	▲0.8	-6.0	-6.5	0.5	4.5	12.3	▲7.8	2.0	3.1	▲1.1	36.7	45.8	▲9.1
	下旬	0.3	1.0	▲0.7	3.9	6.3	▲2.4	-3.7	-4.7	1.0	27.5	13.5	14.0	9.0	4.2	4.8	19.0	64.1	▲45.1
平均または合計		-2.0	-1.0	▲1.0	2.5	4.0	▲1.5	-7.0	-6.9	▲0.2	32.5	44.7	▲12.2	12.0	11.9	0.1	108.5	149.3	▲40.8
4月	上旬	3.1	3.3	▲0.2	7.7	8.5	▲0.8	-1.8	-2.1	0.3	1.0	12.2	▲11.2	1.0	3.3	▲2.3	19.6	58.3	▲38.7
	中旬	7.7	5.7	2.0	13.6	11.9	1.7	2.7	-0.3	3.0	65.0	15.3	49.7	5.0	3.5	1.5	48.0	59.6	▲11.6
	下旬	6.8	8.0	▲1.2	12.8	14.3	▲1.5	1.9	1.4	0.5	7.0	15.6	▲8.6	3.0	3.4	▲0.4	56.7	64.5	▲7.8
平均または合計		5.9	5.7	0.2	11.4	11.6	▲0.2	0.9	-0.3	1.3	73.0	43.1	29.9	9.0	10.2	▲1.2	124.3	182.4	▲58.1
5月	上旬	10.7	10.2	0.5	16.8	16.5	0.3	4.3	3.9	0.4	6.5	28.5	▲22.0	4.0	4.1	▲0.1	60.8	57.4	3.4
	中旬	15.3	13.4	1.9	22.0	19.8	2.2	8.6	7.0	1.6	10.0	19.2	▲9.2	5.0	3.0	2.0	63.2	73.9	▲10.7
	下旬	13.6	14.5	▲0.9	20.4	20.7	▲0.3	7.5	8.8	▲1.3	29.0	29.0	0.0	4.0	4.9	▲0.9	90.4	72.5	17.9
平均または合計		13.2	12.7	0.5	19.7	19.0	0.7	6.8	6.6	0.2	45.5	76.7	▲31.2	13.0	12.0	1.0	214.4	203.8	10.6
6月	上旬	15.2	14.7	0.5	21.1	20.6	0.5	9.4	9.4	0.0	15.0	23.5	▲8.5	3.0	4.1	▲1.1	56.6	60.5	▲3.9
	中旬	19.9	16.8	3.1	25.6	22.5	3.1	14.5	11.9	2.6	21.5	27.5	▲6.0	3.0	4.0	▲1.0	64.5	58.4	6.1
	下旬	22.0	17.9	4.1	27.8	23.3	4.5	16.3	13.2	3.1	87.0	37.5	49.5	4.0	4.2	▲0.2	72.1	51.7	20.4
平均または合計		19.0	16.5	2.6	24.8	22.1	2.7	13.4	11.5	1.9	123.5	88.5	35.0	10.0	12.3	▲2.3	193.2	170.6	22.6
7月	上旬	23.9	19.8	4.1	29.9	25.4	4.5	18.9	15.1	3.8	17.0	44.3	▲27.3	1.0	3.9	▲2.9	77.4	58.6	18.8
	中旬	23.4	21.5	1.9	30.5	27.5	3.0	18.9	16.8	2.1	87.5	29.9	57.6	4.0	4.0	0.0	47.3	62.4	▲15.1
	下旬	24.8	23.1	1.7	30.1	28.7	1.4	20.6	18.5	2.1	23.5	65.4	▲41.9	4.0	3.6	0.4	57.5	67.4	▲9.9
平均または合計		24.0	21.5	2.6	30.2	27.2	3.0	19.5	16.8	2.7	128.0	139.6	▲11.6	9.0	11.5	▲2.5	182.2	188.4	▲6.2
8月	上旬	23.3	22.3	1.0	28.9	28.2	0.7	19.3	17.7	1.6	24.0	62.2	▲38.2	5.0	4.2	0.8	48.3	56.6	▲8.3
	中旬	23.4	21.5	1.9	30.5	27.5	3.0	18.9	16.8	2.1	87.5	29.9	57.6	4.0	4.0	0.0	47.3	62.4	▲15.1
	下旬	20.9	20.1	0.8	26.3	25.8	0.5	17.0	15.4	1.6	104.0	47.3	56.7	6.0	5.3	0.7	39.8	53.8	▲14.0
平均または合計		22.5	21.3	1.2	28.6	27.2	1.4	18.4	16.6	1.8	215.5	139.4	76.1	15.0	13.5	1.5	135.4	172.8	▲37.4
9月	上旬	23.9	19.8	4.1	29.9	25.4	4.5	18.9	15.1	3.8	17.0	44.3	▲27.3	1.0	3.9	▲2.9	77.4	58.6	18.8
	中旬	23.4	21.5	1.9	30.5	27.5	3.0	18.9	16.8	2.1	87.5	29.9	57.6	4.0	4.0	0.0	47.3	62.4	▲15.1
	下旬	14.6	14.0	0.6	20.9	20.6	0.3	9.6	8.3	1.3	38.0	28.1	9.9	4.0	3.8	0.2	60.6	57.5	3.1
平均または合計		20.6	18.4	2.2	27.1	24.5	2.6	15.8	13.4	2.4	142.5	102.3	40.2	9.0	11.7	▲2.7	185.3	178.5	6.8
10月	上旬	12.9	11.6	1.3	19.7	17.1	2.6	6.9	6.7	0.2	4.5	50.5	▲46.0	2.0	5.6	▲3.6	70.8	40.0	30.8
	中旬	7.6	8.4	▲0.8	12.3	14.4	▲2.1	2.8	3.0	▲0.2	26.5	40.1	▲13.6	6.0	5.6	0.4	31.5	44.9	▲13.4
	下旬	4.1	6.5	▲2.4	8.3	12.0	▲3.7	0.5	1.8	▲1.3	58.5	37.3	21.2	8.0	5.7	2.3	23.1	42.0	▲18.9
平均または合計		8.2	8.8	▲0.6	13.4	14.5	▲1.1	3.4	3.8	▲0.4	89.5	127.9	▲38.4	16.0	16.9	▲0.9	125.4	126.9	▲1.5

表3 農耕期間積算値（5月～9月）

期間 \ 項目	平均気温 (°C)	降水量 (mm)	降水日数 (日)	日照時間 (hr)
5月上旬	本年 2,913.0	631.5	60	919.4
～	平年 2,694.9	584.0	62	892.8
9月下旬	比較 218.1	47.5	△ 2.0	26.6

注1) 比布アメダス観測値。平年は過去10ヶ年の平均値。

2) △は、平年に比べて減を示す。

2. 作 況

1) 各作物の耕種概要

各作物の耕種概要は下記の通りである。

表4 畑作物の耕種概要

作物名	前作物	畦幅 (cm)	株間 (cm)	1株 本数 (本)	播種 粒数 (粒/㎡)	株数 (株/10a)	施肥量 (kg/10a)				
							N	P ₂ O ₅	K ₂ O	MgO	堆肥
秋まき小麦	大豆	30	—	—	255	—	4.0+6.0+4.0	10.0	6.0	2.5	—
春まき小麦	ソルガム	30	—	—	340	—	9.0	16.2	10.8	4.5	—
大豆	ばれいしょ	60	20	2	—	8333	1.8	13.2	9.0	4.2	—
小豆	ばれいしょ	60	20	2	—	8333	3.0	12.0	7.0	2.5	—
ばれいしょ	大豆	75	30	—	—	4444	7.5	15.0	10.5	3.8	—

注1) 前作物において、ばれいしょ以外は緑肥としての作付。

2) 秋まき小麦のN施肥量は、基肥+起生期+止葉期。

2) 各作物の作況

(1) 水 稲：やや不良

播種は平年より3日遅い4月18日に行った。出芽の揃いは良好であった。

移植は平年より2日遅い5月21日に行った。移植時の草丈は平年に比べ0.6～1.0cm長く、第1葉鞘高は並から0.2cm長かった。葉数は並から0.4葉多く、茎数は平年並であった。苗100本当たりの地上部乾物重は、「ななつぼし」は平年並で「ゆめぴりか」では0.34g重かった。苗の充実度を示す地上部乾物重/草丈はいずれの品種とも平年並であった。

移植後の5月下旬はやや低温であったが、日照時間は平年をやや上回り生育は概ね順調であった。その後6月上旬および中旬の気温は平年並から高かったため、6月20日の草丈はやや長く、葉数は平年並みからやや多い。茎数は平年並であった。

6月下旬から7月中旬の気温が高温で経過したため、生育はかなり早く進んだ。各生育期節は平年より早く、幼穂形成期は1～2日、止葉期は3～4日、出穂期は6～7日早かった。7月20日の草丈はやや長く、主稈の止葉葉数は平年並からやや多く、茎数は平年に比べて9～18%少なかった。

7月下旬以降は高温傾向であり、登熟は順調に進んでいる。成熟期の稈長はやや長く、穂長は平年並で、穂数は5～13%少なかった。

平年と比べて登熟期間の平均気温はやや高く、日照時間はやや少なかった。このことにより成熟期は平年より8日早く、登熟日数は平年よりやや短かった。稈実歩合は「ななつぼし」で平年より0.5ポイント、「ゆめぴりか」で1.9ポイント高かった。一穂粒数は平年並から7%多く、㎡当たり稈実粒数は両品種とも平年の95%であった。登熟歩合はほぼ平年並であった。

精粒重は平年比95%であった。屑米歩合は「ななつぼし」で平年並、「ゆめぴりか」で平年より1.9ポイント高かった。精玄米千粒重は両品種とも1.0g重く、精玄米重は「ななつぼし」が66.7kg/a、「ゆめぴりか」が59.7kg/aで、各々平年比98%、95%とやや低収であった。玄米の検査等級は「ななつぼし」が1等、「ゆめぴりか」が1等下でいずれも平年より優った。

これらのことから、本年の作況は「やや不良」である。

表5 水稻の生育および収量

品種名			ななつぼし			ゆめぴりか		
項 目 / 年 次			本年	平年	比較	本年	平年	比較
生育期節	播種期 (月・日)		4.18	4.15	3	4.18	4.15	3
	移植期 (月・日)		5.21	5.19	2	5.21	5.19	2
	幼穂形成期 (月・日)		6.21	6.22	△ 1	6.21	6.23	△ 2
	止葉期 (月・日)		7.06	7.09	△ 3	7.06	7.10	△ 4
	出穂期 (月・日)		7.13	7.19	△ 6	7.12	7.19	△ 7
	成熟期 (月・日)		8.27	9.04	△ 8	8.27	9.04	△ 8
	穂揃日数 (日)		7	8	△ 1	7	8	△ 1
	登熟日数 (日)		45	47	△ 2	46	47	△ 1
	生育日数 (日)		131	142	△ 11	131	142	△ 11
移植時	草丈 (cm)		15.3	14.3	1.0	14.8	14.2	0.6
	葉数 (枚)		4.2	4.1	0.1	4.6	4.2	0.4
	茎数 (本/m ²)		146	147	▲ 1	157	155	2
	第1葉鞘高 (cm)		2.6	2.4	0.2	2.4	2.4	0.0
	地上部乾物重 (g/100本)		4.68	4.66	0.02	5.00	4.66	0.34
	地上部乾物重/草丈		0.31	0.33	▲ 0.02	0.34	0.33	0.01
本田生育	葉数 (枚)	6月20日	8.3	8.1	0.2	8.9	8.4	0.5
		7月20日	10.3	10.1	0.2	10.9	10.5	0.4
		止葉葉数	10.3	10.1	0.2	10.9	10.5	0.4
	茎数 (本/m ²)	6月20日	557	538	19	589	611	▲ 22
		7月20日	655	719	▲ 64	688	839	▲ 151
	草丈 (cm)	6月20日	45.3	41.5	3.8	41.3	38.6	2.7
		7月20日	92.9	85.1	7.8	89.4	84.3	5.1
成熟期	稈長 (cm)		75.3	69.4	5.9	68.5	66.2	2.3
	穂長 (cm)		17.0	16.8	0.2	16.7	16.9	▲ 0.2
	穂数 (本/m ²)		639	673	▲ 34	684	783	▲ 99
収量構成要素	一穂粒数 (粒)		50.2	50.8	▲ 0.6	45.8	43.0	2.8
	m ² 当たり粒数 (×100)		321	340	▲ 19	313	336	▲ 23
	稈実歩合 (%)		96.2	95.7	0.5	94.9	93.0	1.9
	m ² 当たり稈実粒数 (×100)		309	325	▲ 16	297	312	▲ 15
	同上記 (%)		95	100	▲ 5	95	100	▲ 5
	登熟歩合 (%)		89.4	89.0	0.4	83.4	83.9	▲ 0.5
	粒摺歩合 (%)		82.0	81.1	0.9	77.7	78.7	▲ 1.0
	屑米歩合 (%)		1.9	1.8	0.1	5.5	3.6	1.9
収量	精玄米千粒重 (g)		23.4	22.4	1.0	23.7	22.7	1.0
	藁重 (kg/a)		69.6	65.3	4.3	62.3	62.6	▲ 0.3
	精粒重 (kg/a)		79.4	83.3	▲ 3.9	75.1	79.3	▲ 4.2
	精玄米重 (kg/a)		66.7	68.1	▲ 1.4	59.7	62.7	▲ 3.0
	屑米重 (kg/a)		1.3	1.2	0.1	3.4	2.4	1.0
	収量平年比 (%)		98	100	▲ 2	95	100	▲ 5
	検査等級 (等)		1	1下	-	1下	2上	-

注1) 平年値は前7か年中、令和元年（最凶年）、令和6年（最豊年）を除く5か年の平均値。

2) △は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

3) 育苗耕種概要 育苗様式：成苗ポット苗

施 肥：成苗培土Hを約1.43 (kg/箱) 充填、

成分量 N 0.5、P₂O₅ 1.0、K₂O 0.8、MgO 0.2 (g/箱)、

置床 N 25.0、P₂O₅ 0.0、K₂O 10.0 (g/m²)

4) 本田耕種概要 栽植密度：25.3株/m² (33.0cm×12.0cm)、3本植

施 肥 量：N 8.0、P₂O₅ 9.7、K₂O 6.9 (kg/10a)、堆肥 1000 (kg/10a)

5) 精玄米千粒重および精玄米重：網目1.90mm以上、水分15%換算。

(2) 秋まき小麦：不良

播種は平年より4日早い9月13日に行った。その後、気温が平年並に推移し、適度な降雨もあったことから出芽期は平年より6日早かった。出芽期以降も気温が平年並からやや高く推移したことから、越冬前の茎数は平年をかなり上回った。

平年と比較して、根雪始は6日、根雪終は2日遅く、積雪期間は4日短い131日であった。雪腐病発病度は並で、越冬茎歩合はやや低かった。気温は平年並みから高い傾向で推移したことから生育が順調に進み、出穂期は平年より2日早かった。草丈は平年並で、茎数は平年を上回った。

成熟期は平年より6日早かった。成熟期の稈長は平年より長く、穂長は平年並で、穂数は生育期間を通して茎数が多く推移し、有効茎歩合も高かったことから平年を大きく上回った。稈長が長く、穂数が多いことに加え、6月27日の暴風雨により倒伏が大きく発生した。

平年より千粒重がかなり軽く、子実重は平年を大きく下回った。容積重も平年を下回った。蛋白質含有率は平年をやや上回った。検査等級は1等だった。これらのことから、本年の作況は「不良」である。

表6 秋まき小麦の生育および収量

品 種 名		きたほなみ		
項 目 / 年 次		本 年	平 年	比 較
播種期 (月・日)		9.13	9.17	△ 4
出芽期 (月・日)		9.21	9.27	△ 6
出穂期 (月・日)		6.01	6.03	△ 2
成熟期 (月・日)		7.09	7.15	△ 6
越冬茎歩合 (%)		116.9	122.5	▲ 5.6
雪腐病発病度		8.8	5.0	3.8
葉数(枚)	令 6年10月20日	5.1	4.1	1.0
草丈 (cm)	令 6年10月20日	24.8	16.7	8.1
	令 7年 5月20日	69.7	46.7	23.0
	令 7年 6月20日	92.4	90.9	1.5
茎数 (本/㎡)	令 6年10月20日	1198	556	642
	令 7年 5月20日	1552	1055	497
	令 7年 6月20日	833	615	218
成熟期	稈長 (cm)	94	81	13
	穂長 (cm)	8.7	8.6	0.1
	穂数 (本/㎡)	818	510	308
子実重 (kg/10a)		533	571	▲ 38
同上平年比 (%)		93	100	▲ 7
容積重 (g/L)		806	841	▲ 35
千粒重 (g)		30.9	41.7	▲ 10.8
蛋白質含有率 (%)		10.1	9.1	1.0
検査等級 (等)		1	1	—

注1) 平年値は前7か年中、収穫年における平成30年（最凶年）、令和5年（最豊年）を除く5か年の平均値。

2) △は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

（３）春まき小麦：やや不良

播種は平年より6日遅い4月24日に行った。播種の遅れを反映して出芽期も平年より4日遅く、草丈、茎数とも平年を下回った。その後も生育は順調に進み、出穂期は平年より1日早い6月17日だった。

成熟期は平年より4日早かった。6月下旬以降、気温がかなり高く推移したこと、穂数は平年よりやや多かった。稈長は平年よりやや短い、穂長は

平年並であった。登熟期間は平年より3日短かった。子実重は平年比96%とやや低収であった。容積重は平年並みで千粒重と蛋白質含有率は平年を下回った。検査等級は平年並の1等であった。

これらのことから、本年の作況は「やや不良」である。

表7 春まき小麦の生育および収量

品 種 名		春よ恋		
項 目	年 次	本 年	平 年	比 較
播種期（月・日）		4.24	4.18	6
出芽期（月・日）		5.06	5.02	4
出穂期（月・日）		6.17	6.18	△ 1
成熟期（月・日）		7.22	7.26	△ 4
草丈 (cm)	5月20日	19.9	21.9	▲ 2.0
	6月20日	82.3	80.2	2.1
茎数 (本/㎡)	5月20日	391	650	▲ 259
	6月20日	559	752	▲ 193
成熟期	稈長 (cm)	89	93	▲ 4
	穂長 (cm)	8.2	8.3	▲ 0.1
	穂数 (本/㎡)	573	508	65
子実重 (kg/10a)		430	447	▲ 17
同上平年比 (%)		96	100	▲ 4
容積重 (g/L)		820	824	▲ 4
千粒重 (g)		35.8	38.7	▲ 2.9
蛋白質含有率 (%)		10.8	11.5	▲ 0.7
検査等級 (等)		1	1	—

注1) 平年値は前7か年中、令和3年（最凶年）、令和6年（最豊年）を除く5か年の平均値。

2) △は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

(4) 大 豆：良

播種は平年より3日早い5月16日に行った。出芽期は平年より2日遅い6月1日であった。開花期は平年より4日早かった。6月下旬以降、気温がかなり高く推移したことから、生育は順調に進み、主茎長は平年に比べかなり長く、主茎節数はやや多く、分枝数は平年並みで、着莢数はかなり多かった。

成熟期は平年より1日早かった。8月下旬以降、降

水量が多く推移し、倒伏が見られた。成熟期の莢数が多く、子実重は平年比123%と多収であった。百粒重は平年よりやや重く、屑粒率は平年並みであった。検査等級は3等下であった。

これらのことから本年の作況は「良」である。

表8 大豆の生育および収量

品 種 名		ユキホマレ		
項 目 / 年 次		本年	平年	比較
播種期 (月・日)		5.16	5.19	△ 3
出芽期 (月・日)		6.01	5.30	2
開花期 (月・日)		7.06	7.10	△ 4
成熟期 (月・日)		9.13	9.14	△ 1
主茎長 (cm)	6月20日	16.3	14.7	1.6
	7月20日	74.2	56.4	17.8
	8月20日	75.1	59.6	15.5
	9月20日	75.3	58.2	17.1
	成熟期	75.3	58.2	17.1
主茎節数 (節)	6月20日	4.1	3.9	0.2
	7月20日	10.9	9.6	1.3
	8月20日	11.0	10.3	0.7
	9月20日	10.7	10.2	0.5
	成熟期	10.7	10.2	0.5
分枝数 (本/株)	7月20日	7.2	5.9	1.3
	8月20日	6.2	6.5	▲ 0.3
	9月20日	6.3	6.1	0.2
	成熟期	6.3	6.1	0.2
着莢数 (個/株)	8月20日	109	81	28
	9月20日	107	81	26
	成熟期	107	81	26
子実重 (kg/10a)		498	406	92
同上平年比 (%)		123	100	23
百粒重 (g)		33.8	33.1	0.7
屑粒率 (%)		1.1	1.4	▲ 0.3
検査等級 (等)		3下	2中	

注1) 平年値は前7か年中、令和3年（最凶年）、令和6年（最豊年）を除く5か年の平均値。

2) △は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

(5) 小 豆 : 不良

播種は、平年より1日早い5月23日に行った。気温が高く推移したことから生育が順調に進み、開花期は平年より3日早かった。7月下旬以降気温は高く推移し、7月中旬の降雨により得た土壌水分や8月中旬の降雨による土壌水分も十分にあったことから地上部生育が旺盛となり、主茎長は平年よりかなり長く、本葉数および分枝数は平年より多く、倒伏が目立っ

た。また、高温の影響と考えられる落花・落莢により着莢が緩慢となり、着莢数は平年を下回った。

成熟期は平年より10日早かった。主茎長は平年よりかなり長く、主茎節数、分枝数も多かった。着莢数は平年を下回った。百粒重も平年よりやや軽く、子実重は平年比92%であった。屑粒率は平年よりやや高かった。検査等級は平年並の3等上であった。

これらのことから、本年の作況は「不良」である。

表9 小豆の生育および収量

品 種 名		エリモ167		
項 目 / 年 次		本年	平年	比較
播種期 (月・日)		5.22	5.23	△ 1
出芽期 (月・日)		6.05	6.07	△ 2
開花期 (月・日)		7.20	7.23	△ 3
成熟期 (月・日)		8.31	9.10	△ 10
主茎長 (cm)	6月20日	5.2	5.3	▲ 0.1
	7月20日	33.7	25.9	7.8
	8月20日	77.5	63.7	13.8
	成熟期	82.0	69	13.0
本葉数 (枚)	6月20日	1.4	1.1	0.3
	7月20日	10.0	8.1	1.9
	8月20日	16.1	13.1	3.0
主茎節数 (節)	成熟期	16.9	13.1	3.8
分枝数 (本/株)	7月20日	5.6	5.8	▲ 0.2
	8月20日	7.5	5.8	1.7
	成熟期	6.4	5.7	0.7
着莢数 (個/株)	8月20日	56	59	▲ 4
	成熟期	48	54	▲ 6
子実重 (kg/10a)		304	331	▲ 27
同上平年比 (%)		92	100	▲ 8
百粒重 (g)		12.8	13.8	▲ 1.0
屑粒率 (%)		4.7	3.2	1.5
検査等級 (等)		3上	3上	-

注1) 平年値は前7か年中、令和3年（最凶年）、令和4年（最豊年）、を除く5か年の平均値。

2) △は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

(6) ばれいしょ：平年並

植付けは平年並の5月9日に行った。植付け後、5月中旬の気温が高く推移したことから、萌芽期は平年より4日早かった。6月中旬以降気温が高く推移したことから、開花始めは平年より2日早かった。茎長は平年より長かった。7月中旬以降は日照時間が少なかったことから枯ちよう期は平年並となった。

上いも数は平年を上回ったが、上いもの平均重はわずかに下回り、上いも収量、中以上いも収量、規

格内いも収量はそれぞれ平年比115、111、95%であった。でん粉価は6月下旬から7月上旬にかけて日照時間が多く推移したことから、当初は平年をやや上回っていたが、その後日照時間の少なさと高温の影響により低下していき、枯凋期の値は平年を1.3ポイント下回った。

これらのことから、本年の作況は「平年並」である。

表10 ばれいしょの生育および収量

品 種 名		男 爵 薯		
項 目 / 年 次		本 年	平 年	比 較
植付期 (月. 日)		5. 09	5. 09	0
萌芽期 (月. 日)		5. 24	5. 28	△ 4
開花始 (月. 日)		6. 20	6. 22	△ 2
枯凋期 (月. 日)		8. 25	8. 25	0
茎長 (cm)	6月20日	30.3	32.0	▲ 1.7
	7月20日	52.7	46.8	5.9
上いも数 (個/株)	7月20日	10.8	8.3	2.5
	8月20日	11.7	9.7	2.0
上いもの 平均重 (g)	7月20日	58	73	▲ 15
	8月20日	85	100	▲ 15
上いも収量 (kg/10a)	7月20日	2803	2657	146
	8月20日	4437	4223	214
でん粉価 (%)	7月20日	15.5	14.5	1.0
	8月20日	13.4	14.6	▲ 1.2
収 穫 期	上いも数 (個/株)	11.6	10.0	1.6
	上いもの平均重 (g)	101	103	▲ 2
	上いも収量 (kg/10a)	5191	4525	666
	同上平年比 (%)	115	100	15
	中以上いも収量 (kg/10a)	4523	4072	451
	同上平年比 (%)	111	100	11
	規格内いも収量 (kg/10a)	3459	3657	▲ 198
	同上平年比 (%)	95	100	▲ 5
	でん粉価 (%)	13.0	14.3	▲ 1.3

注1) 平年値は前7か年中、平成30年（最凶年）、令和4年（最豊年）を除く5か年の平均値。

2) △は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

Ⅲ 試験研究及び地域支援活動

1. 各グループの試験研究成果及び地域支援活動等の概要

1) 水稻畑作グループ

水稻育種部門では、育種試験を担当して極良食味品種および良質糯品種の開発を行っている。

「上育 485 号」、「上育 489 号」、「上育糯 490 号」を優良品種決定調査に供試した。上育 485 号：継続、対照品種「ふっくりんこ」、「ななつぼし」。

「ふっくりんこ」に比べ、出穂期はやや早く、成熟期は同等。多収で玄米品質に優れ、タンパク質含有率が低い。炊飯米外観に優れ、いもち病抵抗性、耐倒伏性も優る。現地でも概ね「ふっくりんこ」、

「ななつぼし」の収量・玄米品質を上回り、評価はほぼ○（やや有望）以上。予備試験により高温登熟耐性に優れることが見込まれる。R8 年度の優良品種認定に向け、試作試験、実需評価および高温耐性評価を行う必要があり、優良品種提案に先行して品種登録申請を行うとともに、優決試験を継続する。

上育 489 号：休止、対照品種「ななつぼし」、「きたくりん」。「ふっくりんこ」に比べ、出穂期、成熟期は同等。多収でいもち病抵抗性が「きたくりん」並に強い。玄米品質に優れ、アミロース含有率が低く食味が優れる。割粳は多い。対照品種に比べ優点が多いが、先行する「上育 485 号」に収量性と玄米品質が及ばず、高温登熟耐性も高くないと見込まれるため、現状では「上育 485 号」に比べ優良品種化の見込みが低い。有望度は○（やや有望）とするが、優決基本試験を 2 カ年実施し特性を確認できたことから、優決試験は休止し、必要が生じた場合再度実施する。再開する際は現地試験 1 年目からを基本とするが、試験会議において協議する。上育糯 490 号：継続、対照品種「きたふくもち」。「きたふくもち」に比べ、出穂期は並～やや遅く、成熟期はやや遅い。いもち病抵抗性が優り、割粳が少ない。白米白度が高く、玄米品質やもちの硬化性、食味は同等。「きたふくもち」の欠点である収量性が改善されているが、現地における収量の安定性を見極める必要がある。試験を継続し、現地試験に供試する。

新配付系統は「上育 H491 号」（「ゆめぴりか」

対照）、「上育糯 492 号」（「きたふくもち」対照）。

畑作部門では、秋まき小麦、春まき小麦、二条大麦、大豆、小豆、菜豆、ばれいしょ、そば、てん菜の担当地域における適応性の評価を行っている。また、秋まき小麦の耐雪性、春まき小麦の初冬まき栽培適性、小豆の茎疫病抵抗性検定・選抜を実施している。

また、水稻および畑作除草剤の実用化試験を実施している。

2) 生産技術グループ

水稻の栽培技術開発、環境保全・土壌肥料に関する試験研究、病害虫に関する試験研究、新農業資材試験、発生予察事業、畑作物および園芸作物に関する優良品種決定試験や栽培法の試験ならびに地域支援活動を担当している。

栽培環境部門では「養分収支と肥料価格を考慮した春まき小麦に対するリン酸施肥指針」と「養分収支と肥料価格を考慮した加工用ばれいしょに対するリン酸施肥指針」、「水稻育苗用培土「パールマット Z」の中苗に対する育苗適応性」、「水稻に対する亜リン酸入り化成肥料「亜リン酸入り 400」の施用効果」の成果をとりまとめ、成績会議で指導参考事項となった。また、試験課題「多様なニーズに対応する米品種改良並びに栽培技術早期確立(第 5 期)」や「環境保全型有機質資源施用基準の設定調査」、「農地管理実態調査」、「地力調査」を、他農試と連携して実施した。

病虫部門では試験課題「きゅうりのホモプシス根腐病に対する化学農薬を用いない防除対策」、「ネオニコチノイド系殺虫剤に依存しない水稻栽培のための防除体系の確立」、「冬季無加温ハウスの葉菜類における総合病害虫管理および適正施肥技術の開発」、「道央地域で安定生産できる中晩生小豆品種の開発強化」、「障害抵抗性に優れる小豆品種の開発促進」を行い、「病害虫発生予察調査」では、水稻、小麦の病害虫、ヤガ類・コナガ・マメシクイガ、オオタバコガについて調査を行った。また、

「農作物病害虫診断試験」では、担当管内の作物に発生した病害虫、生育不良等の原因について調査を

行った。また、新しい殺菌剤及び殺虫剤の各種病害虫に対する防除効果と薬害の有無を検討した。

園芸部門では、「アルストロメリア春植え加温周年切り作型における環境制御技術」の成果をとりまとめ、成績会議で普及推進事項となった。また、試験課題「養液栽培技術の高度化となすにおける活用技術の開発」、「冬季無加温ハウスの葉菜類における総合病害虫管理および適正施肥技術の開発」、「アダプティブ MAP システムを用いたブロッコリーの高鮮度流通試験」、「長期どり可能な春どりいちご系統の品種化」を行った。

地域支援活動は、地域農業技術支援会議として地域要望課題の収集を行うとともに、普及センターの支援要請や部会活動などに対して支援を行った。

2. 各グループの試験研究課題

1) 水稻畑作グループ

A 水稻品種開発

(1) 水稻品種開発事業Ⅲ (令和7～11年)

多様なニーズに対応し、北海道稲作の発展に貢献する、省力栽培が可能な品種、耐冷・耐病性が優れる高品質・極良食味、高品質糯品種、並びに収量性を向上させた業務・加工用水稻品種の早期育成を目指す。

(2) 「日本一の米どころ北海道」の実現へ向けた水稻新品種の開発促進Ⅱ 1. 極良食味で耐病虫性の強い多収品種の開発へ向けた選抜強化 (令和7～11年)

他産地に先駆けた先進的な取り組みが可能となる品種の育成へ向け、中後期世代の選抜を強化する。

(3) 多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術早期確立 (第Ⅴ期) 1. 直播・早生移植用多収および極多収スタンダード品種の開発強化 (令和6～10年)

(中央農試水田農業グループが主管)

初期世代において、収量性、耐病性、耐冷性等の選抜を強化し、極多収で農業特性や業務用炊飯適性に優れた系統、および直播適性を備えた早生で多収な系統の開発を促進する。

(4) 多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術早期確立 (第Ⅴ期) 2. 温暖化と環境負荷の軽減に対応する多収で品質・食味の安定したプレミアム・ミドル品種の開発強化 (令和6～10年)

水稻の初期世代の選抜強化により、耐冷性、耐病性が向上し、品質・食味の高位安定した品種を開発する。

(5) 「ダントツ日本一」の産地を目指す北海道もち米品種の開発促進 (令和4～8年)

既存品種より10%以上多収、耐冷性“強”、葉いもち抵抗性“やや強”以上を目標にもち米品種の開発を促進させる。

(6) 「ゆめぴりか」のブランド力強化に向けた戻し交配による形質改良系統の育成 (令和7～9年)

「ゆめぴりか」のブランド力強化のため、「ゆめぴりか」として販売できる形質が改善された従属品種の開発に向け、戻し交配と薬培養によりタンパク質含有率が0.3～0.5ポイント低下し、穂いもち圃場抵抗性を1ランク以上向上させるなど「ゆめぴりか」の欠点を改良した系統を育成する。

(7) 気候変動への対応と環境負荷軽減を実現する北海道向け高品質極良食味品種の開発 (令和7～9年)

有望系統について、特性検定試験、現地実証試験等を行い、品種化を目指す。北海道における高温登熟耐性検定試験を確立する。

B 水稻優良品種決定試験

(8) 優決 水稻 (優決基本相当) (昭和29年～継続)

育成された有望系統について、生産力その他諸特性を調査し、当地における適応性を検討する

(9) 優決 水稻 (優決現地相当) (昭和29年～継続)

育成された有望系統について、生産力その他諸特性を調査し、現地における適応性を検討する。

C 新優良品種普及促進

(10) 水稻新優良品種普及促進事業 (昭和42年～継続)

新品種の速やかな普及を図るために有望系統の種子の増殖を行う。

D 水稻農業資材試験

(11) 水稻除草剤及び水稻生育調節剤の実用化試験 (昭和45年～継続)

直播栽培向けの剤について、実用化試験を行う。

E 畑作物品種開発（麦類）

（12）畑作物の地域適応性検定試験（秋まき小麦・春まき小麦、優決基本相当）（昭和29・34年～継続）

北農研センター育成秋まき小麦有望系統（北海番号）および北見農試育成秋まき・春まき小麦有望系統（北見・北見春番号）について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討する。

（13）春まき小麦の品種選定試験 1. 適応性試験（優決基本相当）、3. 特性検定試験（4）栽培特性（初冬まき）（令和3～7年）

ホクレン農総研育成春まき小麦有望系統（HW番号）について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討するとともに、初冬まき適性を評価する。

（14）二条大麦の品種選定試験 1. 適応性検定基本試験（優決基本相当）（令和6～8年）

サッポロビール(株)育成二条（ビール）大麦有望系統（札育番号）について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討する。

（15）畑作物の地域適応性検定試験（秋まき小麦・春まき小麦、優決現地相当）（平成15年・平成13年～継続）

北農研センター育成秋まき小麦有望系統（北海番号）、北見農試育成秋まき・春まき小麦有望系統（北見番号）、ホクレン農総研育成春まき小麦有望系統（HW系統）について、現地試験による上川地域への適応性を検定する。

（16）優決 麦類（秋まき小麦・二条大麦、優決現地相当）（昭和33年～継続）

北農研センター育成秋まき小麦有望系統（北海番号）、北見農試育成秋まき小麦有望系統、サッポロビール(株)育成二条大麦有望系統（札育番号）について、現地試験による上川地域への適応性を検討する。

（17）気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進（第4期） 2）地域の生産および品質安定に向けた障害・病害抵抗性と収量性の選抜強化（3）耐雪性の選抜強化①雪腐褐色小粒菌核病抵抗性の検定強化・③春まき小麦の初冬まき栽培特性検定、（6）地域の気象条件に対応した系統の選抜強化②上川地域への適応性の評価（系適相当）ア）春まき小麦・イ）秋まき小麦（令和7～9年）

雪腐病抵抗性検定強化では、北農研センターおよび北見農試育成秋まき小麦のF4・小生予1年目・小生予2年目以降系統および有望系統（北系・北見番号）の発病程度を調査し、これを基に算出した発病度の基準品種との比較により抵抗性を判定する。初冬まき栽培では、北見農試育成春まき小麦有望系統（北見春番号）の初冬まき適性を評価する。適応性の評価では、北農研センター育成秋まき小麦有望系統（勝系番号）および北見農試育成秋まき・春まき小麦有望系統（北系・北系春番号）について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討する。

（18）小麦育種研究に係る系統適応性・特性検定試験（令和7年）

北農研センター育成秋まき小麦有望系統（勝系番号）について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討するとともに、有望系統（北海・勝系番号）について、雪腐病抵抗性を判定する。

F 畑作物品種開発（豆類）

（19）畑作物の地域適応性検定試験（大豆、優決基本相当）（平成26年～継続）

十勝農試育成有望系統（十育番号）について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討する。

（20）畑作物の地域適応性検定試験（小豆、優決基本相当）（昭和34年～継続）

十勝農試育成有望系統（十育番号）について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討する。

（21）優決 大豆（大豆、優決現地相当）（昭和33年～継続）

十勝農試育成有望系統（十育番号）について、現地試験による上川地域への適応性を検討する。

（22）優決 小豆（小豆、優決現地相当）（昭和34年～継続）

十勝農試育成有望系統（十育番号）について、現地試験による上川地域への適応性を検討する。

（23）優決 菜豆（菜豆、優決現地相当）（昭和38年～継続）

十勝農試育成有望系統（十育番号）について、現地試験による上川地域への適応性を検討する。

（24）道央地域で安定生産できる中晩生小豆品種の

開発強化（令和 5～7 年）

十勝農試育成の系統選抜（F5～F6）・小生予（F6～F7）系統および有望系統（十系番号）の茎疫病圃場検定を行い、中晩生小豆系統の抵抗性の評価および選抜を行う。

G 畑作物品種開発（根菜類）

（25）畑作物の地域適応性検定試験（馬鈴しょ、優決基本相当）（平成 19 年～継続）

北農研センターおよび北見農試育成有望系統（北海および北育番号・ホクレン農総研との共同研究育成系統を含む）について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討する。

（26）優決 馬鈴しょ（馬鈴しょ、優決現地相当）（昭和 42 年～継続）

北農研センターおよび北見農試育成有望系統（北海および北育番号・ホクレン農総研との共同研究育成系統を含む）について、現地試験による上川地域への適応性を検討する。

（27）馬鈴しょ輸入品種等選定試験 1）生産力検定試験（馬鈴しょ、優決基本相当）、2）現地試験（馬鈴しょ、優決現地相当）（令和 3～7 年）

海外導入品種、ホクレン農総研およびカルビーポテト(株)育成有望系統（HP および CP 番号）について、生産力その他諸特性の調査並びに現地試験による上川地域への適応性を検討する。

（28）てん菜輸入品種検定試験（てん菜、優決現地相当）（令和 6～10 年）

北農研、ホクレン、北糖および日甜育成または導入系統（北海、H、HT および KWS 番号）について、現地試験による上川地域への適応性を検討する。

H 畑作農業資材試験

（29）新資材（畑作関係除草剤および生育調節剤）の実用化（昭和 45 年～継続）

除草剤 2 点（春まき小麦およびそば）について、実用化試験を行う。

2）生産技術グループ

A 水稻栽培法改善試験

（1）多様なニーズに対応する米品種改良並びに栽培技術早期確立（Ⅳ期） 3）「品種特性にあわせた省力・低コスト栽培技術の確立」（令和 6～10 年）

「そらきらり」の収量性を重視した生産に向け、

マット苗における省力・低コスト栽培技術と窒素施肥法を開発し、栽培適地マップを提示する。また、有望系統における省力・低コスト栽培の適応性を評価する。

（2）多様なニーズに対応する米品種改良並びに栽培技術早期確立（Ⅳ期） 4）収益性と環境負荷軽減を考慮した持続的生産技術の開発

（令和 6～10 年）

収益性確保の観点から、水稻のリン酸とカリを対象に肥料価格を考慮した適正施肥量を明らかにする。また、地力評価と簡易土壌診断による施肥対応技術を開発する。

B 畑作物栽培法改善試験

（3）肥料価格変動に応じたばれいしょ適正施肥量の設定（令和 5～7 年）

収益性確保の観点から、ばれいしょのリン酸およびカリを対象に肥料価格を考慮した適正施肥量を明らかにする。

C 土壌保全・環境保全・土地改良に関する調査

（4）環境保全型有機質資源施用基準の設定調査（平成 10 年～継続）

農業の基盤である土壌環境の経年的変化を総合的に把握し、適切な土壌管理のための基礎資料を得る。

（5）農地土壌炭素貯留等基礎調査事業（農地管理実態調査）（令和 3 年～継続）

農家ほ場を対象として、土壌炭素蓄積量及び有機物施用、作物残渣の鋤込み等による土壌炭素の維持蓄積に寄与すると考えられる農地管理を調査する。

（6）農地土壌炭素貯留等基礎調査事業（農地管理実態調査）（令和 3 年～継続）

農家ほ場を対象として、土壌炭素蓄積量及び有機物施用、作物残渣の鋤込み等による土壌炭素の維持蓄積に寄与すると考えられる農地管理を調査する。

（7）国内資源の肥料利用拡大に向けた調査委託事業（地力調査）（令和 6～9 年）

北海道の農地及び草地に蓄積されている土壌中の養分など地力に関係する性質を調査し、温室効果ガスの削減や、輸入肥料への依存の軽減に向けて、土壌炭素量や土壌理化学性、農地管理実態を明らかにする。

（8）農業農村整備事業等に係る土壌調査

（昭和 40 年～継続）

道営土地改良事業計画地区の土壌断面及び理化学性を調査し、改良対策と工種導入時の留意点を示す。また、整備事業の効果を把握するため、整備による土壌改良効果と作物収量の関連を検討する。

D 病害虫試験

(9) 農作物病害虫生理障害診断・緊急対策試験

(令和 7～11 年)

突発的に発生する病害虫や生理障害の診断、病害虫の薬剤抵抗性遺伝子有無確認を迅速かつ正確に行う。これに加えて、重要な突発病害虫に対しては緊急の対策試験を実施し、生産現場に対して対応策を速やかに提供する。また、道内で新たに発生した病害虫および生理障害の情報を記録し蓄積する。

(10) 病害虫発生予察調査 (昭和 16 年～継続)

植物防疫法に基づいて、病害虫の発生予察法の確立を図るとともに、発生予察情報を関係機関に提供して病害虫防除の適正を図る。

(11) ネオニコチノイド系殺虫剤に依存しない水稻栽培のための防除体系の確立 (令和 7～9 年)

水稻の主要害虫であるアカヒゲホソミドリカスミカメとヒメトビウンカを対象として、道内の主要水稻栽培地域でネオニコチノイド系殺虫剤を使用せずに水稻栽培が可能となる防除体系を確立する。

(12) 冬季無加温ハウスの葉菜類における総合病害虫管理および適正施肥技術の開発 (令和 7～9 年)

冬季無加温栽培の葉菜類で発生する主要な病害虫の種類と発生生態を明らかにし、耕種的防除を中心とした防除対策を確立する。また、本栽培に対応した適正施肥量を策定する。

(13) きゅうりホモプシス根腐病に対する化学農薬を用いない防除対策の確立 (令和 5～8 年)

施設栽培きゅうりにおけるホモプシス根腐病に対する道内産転炉スラグおよび土壌還元消毒の効果を確認し、適用条件、減肥対応指針を策定する。

E 畑作物品種開発 (豆類)

(14) 道央地域で安定生産できる中晩生小豆品種の開発強化 (令和 5～7 年)

初期世代から道央地域に適した個体および系統の選抜を行い、後期世代において道央地域での適応性を明らかにする。茎疫病抵抗性圃場検定により、中晩生小豆系統の茎疫病抵抗性を明らかにする。茎疫病抵抗性 DNA マーカーの高精度化により、基幹品種

への抵抗性導入を進める。

(15) 障害抵抗性に優れる小豆品種の開発促進

(令和 7～9 年)

落葉病抵抗性の初期世代の選抜と後期世代の検定、および茎疫病・萎凋病の後期世代の検定、開花着莢期低温抵抗性検定を行う。あわせて、初期世代集団では温室・暖地を用いた世代促進を行い、耐病性・低温抵抗性に優れる安定生産可能な小豆新品種開発を促進する。

F 野菜類品種開発

(16) 長期どり可能な春どりいちご系統の品種化

3) 地域適応性検定 (令和 6～8 年)

これまでに育成した有望系統を活用し、長期どりが可能な春どり栽培向けいちご多収品種（収量を 50%向上、2t/10a→長期どりで 3t/10a）を開発する。

G 野菜栽培法改善

(17) アダプティブ MAP システムを用いたブロッコリーの高鮮度流通に関する研究 (令和 5～7 年)

青果物用鮮度保持技術「アダプティブ MAP システム」について、道産ブロッコリーの国内流通における鮮度保持効果、利用条件および導入効果を明らかにする。

(18) 養液栽培技術の高度化となすにおける活用技術の開発 (令和 6～8 年)

果菜類養液栽培における簡易な給排水モニタリングおよび日射比例灌水システムを開発し、なすの養液栽培技術と適正な水分管理指針を示す。

H 農業資材試験

(19) 殺菌剤・殺虫剤の実用化試験

(昭和 45 年～継続)

各種病害虫に対する新規農薬 17 点の防除効果を検討し、その実用化を図る。

(20) 肥料・土壌改良およびその他資材

(昭和 45 年～継続)

水稻育苗培土および亜リン酸資材を検討し、その実用性を確認する。

L 革新的技術導入による地域支援

(21) 上川地域における水稻「そらきらり」栽培管理指標の現地実証 (令和 7～8 年)

水稻「そらきらり」の上川地域での栽培実態を調

査すると共に栽培管理指標に基づき栽培を行い、その生育、倒伏程度、収量を調査することで上川地域での「そらきらり」の多収性を実証する。特に多肥疎植栽培で基準収量対比 130%を得るための条件を明らかにすることで「そらきらり」の普及を促進する。

3. 地域支援活動

1) 地域農業技術支援会議

地域農業技術支援会議は、地域農業が抱える課題に迅速に対応するため、農試・普及センター・振興局が一体となって協働により課題解決を図る体制として各振興局ごとに設置されたものであり、課題の把握と集約、対応方策の策定、役割分担と合意形成、実証試験等の実施と成果とりまとめ、検証、評価、普及などを行うこととしている。

本年度の活動として、上川支援会議では、事務局会議（4月30、11月11日）、四者会議（2月20日）、を開催し、必要な調査等を進めた。また、成果を地域に還元する地域関係者会議を開催した（5月28日）。本年度収集した要望課題は3課題（タマネギのハリガネムシ・ゾウムシの防除方法の確立、そばのタデノクチブトサルゾウムシ対策、かぼちゃ疫病の防除対策）であった。

留萌支援会議では、事務局会議（6月25日、12月23日）、四者会議（1月28日）、地域関係者会議（2月26日）を行った。本年度収集した要望課

題は4課題（乳牛の乳質改善に向けた取り組み、有害鳥獣対策の実施、おうとうの栽培技術検討・新品種開発・輸送事故低減、節水型乾田直播の情報提供）であった。プロジェクト課題として実施した1課題（管内一円でのスマート農業の推進）は、スマート農業研修会（11月12日）、スマート農業機械等の導入状況調査を実施した。今後、留萌スマ農ビギナーズガイドを発行する予定。

2) 道北地域農業技術センター連絡会議（NATEC）

上川、留萌、宗谷管内における自治体や生産者団体、民間企業が設置した調査研究・研修機関の情報交換の場としてNATECが設置されている。本年度は幹事会（7月3日：和寒町、2月4日：書面開催）現地検討会（9月2日、あったかファーム）、地域情報交換会・総会（3月12日：WEB開催）等の活動を行った。

3) 上川水稲直播ネットワーク

上川管内における水稲直播栽培技術の普及啓蒙を図る目的で活動を行った。事務局を上川農試が担い、事務局会議（5月15日、10月6日：書面開催）、理事会（6月19日、11月6日）、夏期情報交換会（7月17日）、冬期情報交換会・総会（12月17日）を開催した。

IV 試験研究の成果と普及

1. 技術普及に移された成果

1) 普及奨励事項

(1) 水稻「空育 198 号」(中央農試水田農業 G、生物工学 G、農産品質 G、上川農試水稻畑作 G、道南農試作物病虫 G、)

直播・移植ともに多収。食味が「大地の星」より優れ「えみまる」並。直播栽培での倒伏がやや少ない。「えみまる」より粒厚が厚く屑米・割粃が少ない。「えみまる」より低温苗立性が劣る。

(2) 小麦「HW10 号」(品種名「春紬」)(北見農試麦類畑作 G、中央農試作物 G、病虫 G、農産品質 G、上川農試水稻畑作 G、十勝農試豆類畑作 G、ホクレン農業総合研究所)

「春よ恋」より 2.2 mm 篩上子実重が優れ、耐倒伏性も優れる。フォーリングナンバーが低下しにくく、パン適性が「はるきり」より優れる。

(3) てんさい「HT55」(北見農試麦類畑作 G、十勝農試豆類畑作 G、中央農試作物 G、上川農試水稻畑作 G、北海道農産協会)

根中糖分がやや高く糖量が多い。褐斑病抵抗性がかなり強。根腐病抵抗性が強。抽苔耐性がやや強で対照品種「ライエン」より劣る。

(4) てんさい「KWS 3K503」(北見農試麦類畑作 G、十勝農試豆類畑作 G、中央農試作物 G、上川農試水稻畑作 G、北海道農産協会)

根中糖分が高く糖量がやや多い。褐斑病抵抗性が極強。根腐病抵抗性がやや弱。

2) 普及推進事項

なし

3) 指導参考事項

(1) ばれいしょ地域在来品種等「CP14」の特性(北見農試生産技術 G、中央農試作物 G、予察診断 G、十勝農試豆類畑作 G、上川農試水稻畑作 G)

ジャガイモシストセンチュウ抵抗性でそうか病抵抗性が「トヨシロ」より優れる“やや強”である。収量が産地により低い場合があるが、チップスのカラーが「トヨシロ」より優れ、ポテトチップスおよ

びスナックの加工適性がある。

(2) : ばれいしょ地域在来品種等「CP15」の特性(北見農試生産技術 G、中央農試予察診断 G、十勝農試豆類畑作 G、上川農試水稻畑作 G)

ジャガイモシストセンチュウ抵抗性で、Y モザイク病抵抗性およびそうか病抵抗性が「スノーデン」より優れる。でん粉価が「トヨシロ」より高く、比重調整用のスナック加工適性がある。

(3) 養分収支と肥料価格を考慮した春まき小麦に対するリン酸施肥指針(北見農試生産技術 G、中央農試生産技術 G、上川農試生産技術 G)

リン酸収支はリン酸施肥量 5~10kg/10a で均衡した。収量性と収益性も考慮し有効態リン酸含量 10~20mg/100gm で施肥標準量(12~15kg/10a)、20~30mg/100g で施肥標準量の 5 割(6~8kg/10a)、30mg/100g 以上でリン酸施肥量 0 を新たな施肥指針として提案する。

(4) 養分収支と肥料価格を考慮した春まき小麦に対するリン酸施肥指針(北見農試生産技術 G 中央農試生産技術 G、上川農試生産技術 G)

リン酸収支はリン酸施肥量 5~10kg/10a で均衡した。収量性と収益性も考慮し、有効態リン酸含量 10~20mg/100gm で施肥標準量(12~15kg/10a)、20~30mg/100g で施肥標準量の 5 割(6~8kg/10a)、30mg/100g 以上でリン酸施肥量 0 を新たな施肥指針として提案する。

(5) 養分収支と肥料価格を考慮した加工用ばれいしょに対するリン酸施肥指針(十勝農試生産技術 G 上川農試生産技術 G)

養分収支と肥料価格に基づき、新たなリン酸施肥指針を定めた。有効態リン酸含量 5~10 mg/100g ではリン酸施肥量を 24~26 kg/10a、10~20 mg/100g では 14~15 kg/10a、20~30 mg/100g では 7~8 kg/10a とし、30 mg/100g 以上では無施肥とした。

4) 研究参考事項および行政参考事項

なし

2. 論文ならびに資料

1) 研究論文、試験成績

著者名	論文名	学会誌名	号数	頁	発行年
Takumi Fujiki, Keisuke Iwabuchi, Taishi Kumagai, Ayano Endo, Yutaka Jitsuyama, Takashi Suzuki	Using MALDI-TOF q-MSI for detailed comparison of varietal and tissue regional differences in strawberries	Journal of Food Composition and Analysis	143	—	2025
Daisuke Sasaki, Akihide Koguchi	Ctenocallis setosa (Kaltenbach, 1846 (Hemiptera, Aphididae), a new adventive species in Japan	Journal of Insect Biodiversity	63	51-63	2025
Kiwamu Ishikura, Nobuhiko Fueki, katsuhisa Niwa	Progress in “Clean Agriculture” for Nitrogen Management to Enhance the Soil Health of Arable Fields and Its Application by Remote Sensing in Hokkaido, Japan.	Agriculture	15	1192-1192	2025
松田健太郎、松野和夫、金子修治、土井誠、片山晴喜、佐々木大介、田中弘太、井鍋大祐、加藤光弘、芳賀一	静岡県中遠地域における2001年から2017年にかけてのイネ縞葉枯病とヒメトビウンカの発生状況および水稲ほ場のヒメトビウンカ発生数が翌年のイネ縞葉枯病発病株率に及ぼす影響	関西病虫害研究会報	67	20-24	2025
Daisuke Sasaki, Shun'ichiro Sugimoto, Yuji Yamauchi	Additional records of a non-native species, Thelaxes suberi (Hemiptera, Aphididae, Thelaxinae) on its distribution, host plant, and attending ant in Japan, with notes on its nymphal morphology and phenotypic plasticity	Japanese Journal of Systematic Entomology	31	64-68	2025
藤根統	デルフィニウム属におけるうどんこ病菌 <i>Erysiphe aquilegiae</i> var. <i>ranunculi</i> の寄生性の違い	北日本病虫研究会報	76	47-50	2025
笛木伸彦、高田裕介、小原洋、中村隆一、小宮山鉄兵、田中龍生、中川進平、高階史章	肥料危機時代に土壌肥科学はどう応えるのか ①土壌の養分蓄積と肥料流通・生産現場の実態	日本土壌肥学雑誌	97	43-47	2025
Hisanori Okamiya, Daisuke Sasaki, Toshio Kishimoto	Ecological notes of Coccinella hasegawai Miyatake, 1963 (Coleoptera, Coccinellidae)	Elytra, New Series	15	186-188	2025
Shizen Ohnishi, Kentaro Horikawa, Naoya Yamaguchi, Chihiro Souma, Yumi Sato, Koichi Morita, Tatsuya Sonoda	Novel allele derived from a Japanese landrace wheat ‘Asakazekomugi’ for Fusarium head blight resistance without yield penalty and thousand grain weight reduction.	Breeding Science	76 (2)	155-164	2025
内山知二、井原啓貴、今野智寛、鷺尾建紀、金田吉弘、吉田清志、笛木伸彦、西田瑞彦	みどりの食料システム戦略の時代に土づくりをどう伝えるか	日本土壌肥学雑誌	96 (6)	523-529	2025
Tamon Fumoto, Satoshi Kumagai, Yu Okashita, Norimasa Tanikawa, Masaya Kuribayashi, Ryotaro Hirose, Hiroyuki Hasukawa, Rie Kusuda, Keisuke Ono, Nobuko Katayanagi, Yusuke Takata	Contribution of Biological Nitrogen Fixation and Ratoon Rice Growth to Paddy Soil Fertility: Analyses via Field Monitoring and Modeling	Agriculture	16	239-269	2025
望月賢太、古賀伸久、熊谷聡、岡下悠、谷川法聖、小野寺真由、中川進平、遠藤佳那子、吉沢克憲、佐藤怜佳、窪田成美、宮吉沙知、唯倫代、高橋萌会、栗林将也、大橋祥範、鈴木良地、廣瀬亮太郎、平野温子、有吉真知子、西田美沙子、平山裕介、中川路晴香、前上門陽、赤嶺拓矢、高田裕介、滝本貴弘、江口定夫	有機質資材からの養分供給量予測による減化学肥料栽培の全国実証	日本土壌肥学雑誌	97 (1)	21-34	2025
Mito Ikemoto, Daisuke Sasaki, Shoko Nakamura	First report of a North American aphid Uroleucon luteolum Williams (Hemiptera: Aphididae) in Japan	Journal of Asia-Pacific Biodiversity	19 (1)	70-84	2025
黒崎英樹、萩原誠司、鈴木千賀、田中義則、山崎敬之、大西志全、白井滋久、松川勲、湯本節三、角田征仁、谷藤健	高イソフラボン含量ダイズ新品種「ゆきびりか」の育成	北海道立総合研究機構農業試験場集報	110	1-16	2025

2) 口頭・ポスター発表

発表者名(所属)	発表名	発表場所	開催地	開催期間
高橋春南、五十嵐秀成、小林聡、山口直矢	豆腐の食味向上を目的としたEMS突然変異および交雑由来大豆における高シヨ糖系統の選抜	日本育種学会第148回講演会	札幌市	9/10-9/11
笹木伸彦、竹内悠真、巽和也、安藤薫、熊谷聡、熊谷太司、中村隆一	複数の長期三要素試験から見た無リンおよび無カリウムが水稻収量に及ぼす影響	日本土壌肥科学会2025年度新潟大会	新潟市	9/17-9/19
神野裕信	市民公開シンポジウム「近未来の理想の作物を求めて」 育種家の立場から	日本育種学会市民公開シンポジウム	札幌市	9/11
竹内悠真、熊谷聡、笹木伸彦	北海道の移植水稻栽培における灌漑水を含めたカリ収支	日本土壌肥科学会2025年度新潟大会	新潟市	9/17-9/19
熊谷太司、竹内悠真、佐々木瞭太、熊谷聡、笹木伸彦	リン酸・カリウム施肥の有無と種いも重量の違いがバレイショの生育に及ぼす影響	日本土壌肥科学会北海道支部会2025年	札幌市	12/3
笹木伸彦、丹羽勝久、原圭祐、李婧阳、王秋菊、刘峰	中国黒竜江省における白漿土(はくしょうど)の特徴	日本土壌肥科学会北海道支部会2025年	札幌市	12/3
福川英司、野田智昭	ナスセル成型苗の苗質の違いが生育および収量性に及ぼす影響	北海道園芸研究談話会研究発表大会	札幌市	12/7
野田智昭、松岡祐樹、杉本顕、引地達也、武田貴宏	プラスチックフィルムを用いないAMSによるブロッコリーの鮮度保持輸送	園芸学会令和8年度春季大会	川崎市	3/21-3/22
熊谷太司、竹内悠真、佐々木瞭太、熊谷聡、笹木伸彦	リン酸およびカリウム減肥条件における種イモのリン酸およびカリウムがバレイショの萌芽に及ぼす影響	園芸学会令和8年度春季大会	川崎市	3/21-3/22
其田達也、大西志全、木内均、足利奈奈、森田耕一、林和希、神野裕信、粕谷雅志、吉村康弘、佐藤三佳子、小林聡、西村努、来嶋 正朋、樋浦里志、井上哲也、鈴木孝子、相馬 ちひろ、小倉玲奈、千田圭一、竹内薫、菅原彰、東岱孝司	北海道初の菓子用コムギ品種「北見95号」の育成	日本育種学会第149回講演会	水戸市	3/21-3/22
森田耕一、粕谷雅志、阿出川さとみ、相馬ちひろ、堀川謙太郎、木下雅文、尾崎洋人	高温登熟耐性遺伝子Apq1が北海道の水稻の生育および玄米品質に及ぼす影響	日本育種学会第149回講演会	水戸市	3/21-3/22
佐々木大介	シナガワハギマダラアブラムシ(仮称)の国内初発生	2025年度北海道応用動物・昆虫研究発表会	札幌市	1/22
佐々木大介	北海道におけるニセダイコンアブラムシの越冬法	第79回北日本病害虫研究発表会	盛岡市	2/18-2/19

3) 専門雑誌、著書・資料

著者名(所属)	タイトル/書籍名	雑誌名/発行者	号数・ISBN	頁	発行年
藤根統	紫外光(UV-B)を利用したデルフィニウムうどんこ病の省力的防除法	グリーンレポート	令和8年2月号	10-11	2025
野田智昭	なるほど新技術 ケール	ニューカントリー	12月号	56-57	2025
古川勝弘	コオロギ飼育における農産廃棄物の利用可能性について	昆虫と自然	12月号	27-30	2025
長濱恵	粒剤2回散布で規格・収量維持 発病後の対応も同等の効果示す	ニューカントリー	10月号	15-16	2025
野田智昭	冬季無加温栽培ボーレコール(「ゆきあまケール」)の栽培・貯蔵技術	グリーンテクノ情報	21-3巻	6-10	2025
熊谷聡、五十嵐俊成	水稻減化学肥料栽培における有機質肥料の早期施肥技術	農業および園芸	101巻第4号	1011-1017	2025
藤根統	農業技術大系『花卉編』紫外光(UV-B)を利用したデルフィニウムうどんこ病の省力的防除法	農山漁村文化協会	追録第28号	734の10-15	2025
長濱恵、藤根統、佐々木大介、古川勝弘	北海道病害虫防除提要	北海道植物防疫協会	第8版	—	2025

4) 新聞等記事

著者名(所属)	タイトル	新聞等名	発行日
	アスパラガスの疫病には株元に粒剤2回散布!	農業共済新聞	2月3週号
	冬季無加温栽培ボーレコール(ゆきあまケール)の栽培・貯蔵技術	農業共済新聞	2月4日付

5) 印刷刊行物

名称	発行日	頁数	配布先
道総研農試研究資料第45号	R6/11/8*	123	関係機関および希望者 * HP公開日。印刷物発行はR7.5月
令和6年度（2024）上川農業試験場年報	10月27日	31	簡易製本で場内配布、およびホームページにて公開

3. 研修生の受入

1) 普及指導員研修

名称	開催日	開催地	参加者数	対象者	対応者
普及指導員高度専門技術研修（稲作・前期）	6/17, 18	上川農試	2	農業改良普及員	水稻畑作G、生産技術G
令和7年度新技術伝達研修（上川）	2/9	WEB	—	上川農業改良普及センター職員	水稻畑作G、生産技術G
令和7年度新技術伝達研修（留萌）	2/9	WEB	—	留萌農業改良普及センター職員	水稻畑作G、生産技術G

2) 学校教育研修・職場体験学習

名称	開催日	開催地	参加者数	対象者	対応者
拓殖大学北海道短期大学学生研修	6/11	上川農試	63	教員、学生	研究部長、各G
旭川市立江丹別小学校総合学習	7/11	上川農試	2	生徒、教員	研究部長
比布中央学校農業インタビュー	8/26	上川農試	17	比布中央学校7学年（中1）、教員	研究部長
北海道庁インターンシップ（大学生）実務研修	8/28	上川農試	2	上川総合振興局職員、研修生	研究部長、各G

3) JICA 研修等

名称	開催日	開催地	参加者数	対象者	対応者
イリノイ州ハートランドコミュニティカレッジ視察	5/20	上川農試	9	視察団、通訳、旭川市職員	研究部長、各G

4) その他

名称	開催日	開催地	参加者数	対象者	概要
上川管内農業改良普及センター所長・支所長会議視察研修	6/20	上川農試	20	普及センター所長、支所長、上川技術普及室、上川総合振興局	場概要説明、圃場視察

4. 技術相談及び技術指導

1) 技術相談

内容	相手方	月日	回答方法
病害虫の同定	農改普及センター	3/19	メール
水稻の種子消毒方法	生産者団体	3/21	訪問
病害虫の同定	農改普及センター	3/28	メール
ヤマトトウキに発生したアブラムシについて	大学・公的研究機関	4/4	メール
ヌルデシロアブラムシの生態について	大学・公的研究機関	4/4	メール
有機たまねぎ育苗培土について	大学・公的研究機関	4/11	メール
ばれいしょ栽培とカリウムについて	大学・公的研究機関	4/8	電話
そうか病とアルミニウムについて	生産者団体	4/9	電話
心土破碎と排水改良について	民間会社・機関	4/9	電話
「ゆめびりか」の品種特性について	一般市民	5/1	電話
水稻種子のカビについて	大学・公的研究機関	4/22	メール
水稻苗の白化について	民間会社・機関	4/28	電話
「そらきり」種子の発芽について	農改普及センター	5/7	電話

(つづき)

内容	相手方	月日	回答方法
ハイコヌカグサに対する除草剤効果について	大学・公的研究機関	4/30	メール
新顔冬野菜について	行政・地域指導機関	5/8	メール添付
土壌の窒素分析について	大学・公的研究機関	5/8	メール
畑の排水改良について	大学・公的研究機関	5/8	メール
水田土壌の施肥について	生産者団体	5/9	電話
マイマイガの大量発生対策について	行政・地域指導機関	5/23	メール
冬季無加温野菜栽培について	一般市民	6/9	電話
「野菜の健康診断」について	一般市民	6/9	電話
きゅうりの萎れ症状について	農改普及センター	6/5	メール
宿根ネギの根について	大学・公的研究機関	6/6	メール
西瓜ときゅうりの病害について	農改普及センター	6/13	メール
アスパラガス疫病の防除法について	生産者・生産法人	6/13	電話
小松菜の根こぶ病	農改普及センター	6/16	現地対応
「きらら397」種子について	民間会社・機関	6/27	電話
大麦黄枯病の対策について	農改普及センター	6/27	メール
施肥ガイドの地域区分について	生産者団体	6/30	電話
有機質肥料の製造について	行政・地域指導機関	6/30	電話
石灰質資材について	行政・地域指導機関	7/1	電話
そばの害虫について	行政・地域指導機関	7/4	メール
小麦の赤かび病の調査方法について	生産者団体	7/4	電話
そばのタデノクチプトサルゾウムシについて	行政・地域指導機関	7/8	メール
水稻の葉先が枯れる症状について	生産者団体	7/18	電話
ミニトマトかいよう病について	農改普及センター	7/22	来場
有機たまねぎ育苗培土について	大学・公的研究機関	7/28	メール
上川中部で作付された水稻品種について	生産者団体	7/28	メール
ラズベリーの管理について	一般市民	7/30	電話
リモートセンシングの研究方法について	行政・地域指導機関	8/4	対面
土壌窒素培養実験について	行政・地域指導機関	8/4	対面
窒素環境容量について	行政・地域指導機関	8/4	対面
土壌凍結の農業技術化について	行政・地域指導機関	8/5	対面
トウモロコシの窒素施肥について	行政・地域指導機関	8/5	対面
キュウリの果実食害について	農改普及センター	8/5	メール
レタスの抽苔について	行事参加者	8/6	口頭
炭腐病の病徴について	行政・地域指導機関	8/7	メール
水田畦際の苗活着不良について	生産者・生産法人	8/14	口頭
基盤整備圃場の生育不良について	生産者・生産法人	8/14	口頭
基盤整備直後の圃場における不等沈下について	生産者・生産法人	8/14	口頭
ノビエによる水稻の減収程度について	生産者・生産法人	8/14	口頭
水稻除草剤の効果が低下する要因について	生産者・生産法人	8/14	口頭
水田の中干による生育改善の仕組みについて	生産者・生産法人	8/14	口頭
水稻の収穫適期について	生産者・生産法人	8/14	口頭
水稻の登熟適温について	生産者・生産法人	8/14	口頭
「ななつぼし」の収量水準について	生産者・生産法人	8/14	口頭
水稻登熟歩合の地域間差について	生産者・生産法人	8/14	口頭
本年の水稻生育、作柄概況について	民間会社・機関	8/19	来場
新品種の開発状況について	民間会社・機関	8/19	来場
北海道における高温登熟耐性品種育成の状況について	民間会社・機関	8/19	来場
北海道における水稻品種の育成について	民間会社・機関	8/25	来場
北海道における高温登熟耐性品種育成の状況について	民間会社・機関	8/25	来場
作物の新品種の開発状況について	民間会社・機関	8/25	来場
スイートコーンを加害する鱗翅目幼虫について	農改普及センター	8/29	メール
「喜寿糶」の出穂時期について	一般市民	9/10	電話
アスパラガス高畦栽培について	農改普及センター	9/10	訪問
カボチャの疫病について	農改普及センター	9/11	メール
いちごの異常花について	行政・地域指導機関	9/16	口頭
米アレルギーについて	生産者団体	10/10	電話
アスパラガス疫病について	民間会社・機関	9/25	メール
アスパラガスの高畦の作成方法について	農改普及センター	10/8	メール
「ゆきあま」について	行政・地域指導機関	10/10	WEB会議
そばの無農薬栽培における低収対策について	生産者・生産法人	10/15	電話
水稻の水耕栽培について	民間会社・機関	10/15	口頭
アスパラガス茎枯病の発生状況について	行政・地域指導機関	10/21	メール
ケールについて	報道機関	11/6	電話
水稻の作況について	行政・地域指導機関	11/13	電気
パイプハウスの統合環境制御装置の普及状況について	生産者・生産法人	11/18	口頭
水稻を未刈取で冬を越すと圃場はどうなるか	生産者・生産法人	11/21	電話
カボチャの差圧乾燥について	生産者・生産法人	11/28	電話
みつばの褐変症状について	民間会社・機関	12/8	電話
土壌分析依頼について	生産者・生産法人	12/15	電話
そばのタデノクチプトサルゾウムシ被害について	行政・地域指導機関	12/19	来場

(つづき)

内容	相手方	月日	回答方法
水稲の病害虫対策について	農改普及センター	12/11	来場
大豆の病害虫対策について	農改普及センター	1/8	来場
水稲直播栽培における肥料試験について	民間会社・機関	1/15	電話
水稲の世代促進栽培について	生産者団体	1/21	電話
なすの養液栽培について	生産者団体	1/21	電話
トウモロコシの殺虫剤について	生産者団体	1/26	電話
さつまいもの栽培について	生産者・生産法人	2/6	電話
お米の残留農薬について	一般市民	2/10	電話
堆肥の製法について	一般市民	2/13	電話
水稲鉄コーティング種子について	農改普及センター	2/4	電話
水稲のリン酸カリ減肥について	生産者・生産法人	2/24	電話
アブラムシの種類について	大学・公的研究機関	2/18	メール
クモが捕食していたアブラムシの種類について	行政・地域指導機関	2/23	メール
施肥ガイドにおける鶏糞の扱いについて	民間会社・機関	2/26	電話
MAP流通における積算温度の考え方について	農改普及センター	2/26	電話
水稲種子の入手方法について	生産者・生産法人	3/17	電話
水稲種子の入手方法について	生産者・生産法人	3/17	電話
成苗ポットの疎植について	生産者・生産法人	3/31	電話

2) 技術指導

内容	相手方	月日	合同対応機関
適正なカットブレイカー施工に係る技術指導	生産者団体	5/30	留萌農業改良普及センター
シャインマスカット栽培講習会	生産者団体	6/17	旭川市農業センター
「そらきらり」栽培技術指導	生産者団体	6/27	上川農業改良普及センター
水稲栽培指導	生産者団体	8/4	
「そらきらり」栽培マニュアル解説	生産者団体	8/29	上川農業改良普及センター
小麦の分析（インフラテック）技術指導	農改普及センター	8/21	
小麦の分析（インフラテック）技術指導	農改普及センター	9/3	
水稲栽培指導	行政・地域指導機関	9/18	
そば間作クローバーの適正な播種量の評価について	農改普及センター	9/25	上川農業改良普及センター
シャインマスカット栽培指導	生産者団体	10/2	旭川市農業センター
そば間作クローバーの播種量評価について	農改普及センター	10/2	上川農業改良普及センター
米の分析（穀粒判別機）技術指導	民間会社・機関	10/6	
るもいスマート農業研修会	行政・地域指導機関	11/12	留萌振興局、留萌農業改良普及センター、ホクレン留萌支所
冬季無加温栽培野菜について	民間会社・機関	11/28	
北海道米の新品種育成について	生産者団体	12/2	
豆作り講習会	民間会社・機関	2/12	
「そらきらり」試験結果への助言について	生産者団体	3/10	
冬季無加温栽培野菜について	民間会社・機関	3/13	
北海道米の新品種育成について	生産者団体	2/10	
北海道米の新品種育成について	生産者団体	2/26	
そば連作圃場のさつまいも栽培導入について	学校・学生・生徒	1/7	
そば連作圃場のさつまいも栽培導入について	学校・学生・生徒	3/19	
シャインマスカット剪定講習会	生産者団体	11/27	旭川市農業センター
(以下持ち込み診断)			
いちご疫病	行政・地域指導機関	6/19	
スイートコーン出芽不良、ミズアブ幼虫	農改普及センター	6/13	
大豆ノシノマダラメイガ	民間会社・機関	5/7	
ミニトマト、トマトキバガ	農改普及センター	5/19	
いちご根腐病、萎凋病	農改普及センター	6/3	
リンゴの苗木胴腐病	農改普及センター	6/3	
秋まき小麦フレッケン症状	農改普及センター	6/16	
秋まき小麦条斑病	農改普及センター	6/16	
ミニトマト、トマトキバガ	農改普及センター	6/25	
春まき小麦、クビアカクビホソハムシ	農改普及センター	6/27	
春まき小麦アワヨトウ	農改普及センター	7/10	

(つづき)

内容	相手方	月日	合同対応機関
スターチス株腐病	農改普及センター	7/17	
水稻止葉ねじれ症状	農改普及センター	7/22	
メロンつる枯病	農改普及センター	8/7	
大豆べと病	農改普及センター	8/21	
アスパラガス、枯れた株元に黒い菌核	農改普及センター	4/11	
種馬鈴薯凹凸	農改普及センター	4/11	
小麦縮萎縮病	農改普及センター	4/28	
小麦縮萎縮病	農改普及センター	5/7	
小麦縮萎縮病	農改普及センター	5/9	
小麦縮萎縮病	農改普及センター	5/9	
秋まき小麦生育不良	農改普及センター	5/9	
ミニトマト	農改普及センター	5/15	
種馬鈴薯腐敗	農改普及センター	5/21	
中玉トマト、ミニトマト、トマトキバガ	農改普及センター	6/2	
ホップ、クジャクチョウ	農改普及センター	6/5	
トマトキバガ	農改普及センター	6/12	
種芋出芽不良→不明	農改普及センター	6/13	
トマト、トマトキバガ	農改普及センター	6/17	
すいかつる割病	農改普及センター	6/19	
トマト、トマトキバガ	農改普及センター	6/19	
トマト、トマトキバガ	農改普及センター	6/20	
はつかだいこん、アフアノマイセス	農改普及センター	6/24	
二条大麦黄枯病	農改普及センター	6/25	
ピーマン実に黒点	農改普及センター	6/27	
ピーマン生理障害	農改普及センター	7/1	
トマト青枯病	農改普及センター	7/4	
ミニトマト、トマトキバガ	農改普及センター	7/4	
きゅうり葉の枯れ	農改普及センター	7/14	
デルフィニウム青枯病	農改普及センター	7/24	
水稻褐変穂	農改普及センター	8/5	
タマネギ、シラフヒョウタンゾウムシ	農改普及センター	8/6	
デルフィニウム苗立枯病	農改普及センター	8/7	
ピーマンPMMoV	農改普及センター	8/12	
タマネギ黒い斑点	農改普及センター	9/9	
醸造用ぶどう、灰色かび病	農改普及センター	9/22	
ミニトマト根の黒点	農改普及センター	10/1	
食用ゆり鱗片の褐変	農改普及センター	10/28	

5. 講師等の派遣

講演会等の名称	依頼元	月日	担当者
札幌消費者協会講演会	札幌消費者協会	10/9	
北海道のサツマイモについて			
北海道のクリーン農業における土壌健康、 土壌診断、施肥技術について	黒竜江省農業科学院齊齊哈爾 分院	8/5	
第5回さつまいも交流会	北海道科学技術総合振興セン ター	12/12	
豆作り講習会	北海道農政部生産振興局農産 振興課豆麦類係	2/12	
豆作り講習会	北海道農政部生産振興局農産 振興課豆麦類係	2/12	
気候変動時代の稲作灌漑	北海道土地改良事業団体連合 会上川支部	2/5	

6. 関連委員会・学会研究会役員

名称	機関名	担当者
日本土壌肥料学会部門長（第7部門：肥料・土壌改良 資材）	日本土壌肥料学会	
Soil Science and Plant Nutrition, Editorial Comittee	Soil Science and Plant Nutrition, Editorial Office	
旭川工業高等専門学校運営懇話会委員	旭川工業高等専門学校	

V 広報・場運営・その他

1. 広 報

1) 一般参観来場者

今年度の一般参観来場者数：468 名

2) 公開デー

開催日：令和 7 年 8 月 6 日（水）10:00～13:00

来場者：289 名

3) 新技術発表会「道北農業新技術 2026」

開催日：令和 8 年 2 月 25 日（水）13:00～16:00

場 所：比布町農村環境改善センター多目的ホール

内 容：表 11 を参照

参加者：上川農試除き 81 名

表 11 「道北農業新技術 2026」の開催内容

講演タイトル	講演者
(1) 新品種・新技術トピックス	
直播栽培に向く水稲新品種！たくさんとれて美味しい「空育198 号」	
多収で倒伏に強いソン麦新品種「春紬（はるつむぎ）」	
病害虫に強くポテトチップスがきれいに揚がる！ばれいしょ新品種「北育33 号」	
土壌の蓄積リンを積極活用！直播でんさい、加工用ばれいしょ、春まき小麦、たまねぎの新しいリン酸施肥	
土寄せ培土で雑草を抑え密植と追肥で増収！大豆有機栽培のコツ	
年明けも道産かぼちゃを食卓に！おすすめ品種と省力栽培・貯蔵技術	1)
燃料削減と増収を両立！環境制御によるアルストロメリアのハウス栽培	
令和8年に特に注意を要する病害虫	
(2) ポスターセッション（令和8年に普及に移される新しい技術のうち、上記含めのべ15課題）	
(3) 普及活動事例の紹介	
地域が動いたフルーツトマト栽培	2)
(4) 地域農業技術支援会議の紹介	3)

1) 中央農業試験場、2) 上川農業改良普及センター、3) 上川総合振興局

4) マスコミ等への対応

取材日	取材者	掲載・放送	内容	対応者
4/7	北海道新聞旭川支社	新しいトップに対するインタビュー 4/9	上川農業試験場での意気込みについて他	
4/22	メディアあさひかわ	新しいトップに対するインタビュー 6月号	同上	
7/24	メディアあさひかわ	近年の気候変動に対する水稲分野での 対応 9月号	同上	
8/12	北海道新聞	道総研における水稲高温耐性品種の開 発状況	水稲の高温障害、北海道における高温耐 性品種の開発状況	
8/13	日本経済新聞札幌支社	道総研における水稲高温耐性品種の開 発状況	水稲の高温障害、北海道における高温耐 性品種の開発状況	
12/13	ホクレンアグリ ポート編集事務局	暑さに強い水稲新品種の開発に向けて 8/1	気候変動に伴う水稲栽培における課題と 取り組み	
12/22	日本農業新聞	高温が北海道水稲の生育や品質に及 ぼす影響	温暖化が北海道水稲の生育、品質に及ぼ す影響	
2/4	日本経済新聞札幌支社	冬季無加温栽培について 2/17, 18	研究の経緯、保温の考え方、品目選定な ど	
3/4	NHK旭川放送局 テレビ北海道 北海道新聞旭川支社 日本農業新聞	温室での水稲収穫 放映3/4(NHK)、3/5 (TVH) 掲載3/6 (道新)、3/8 (農新)	温室でのF1世代収穫作業	

5) イベント等への出展

名称	出展日	イベント名称	内容	開催地
「たねアート」をつくってみよう	10月11日	第34回 木になるフェスティバル	小さな木の板に描いた下絵に沿ってさまざまな色、大きさの各種種子を貼り付け、点描風アートを作る体験イベント。	林産試験場

2. 場運営

1) 場内委員会

(1) 構成

委員会名	委員長	副委員長	委 員 (f: 技術普及室職員、k: 組合推薦者)
公開デー実行委員会			
新技術発表会実行委員会 ^f			
業務委員会			
図書・情報システム委員会			
作況・気象委員会			
公宅委員会			
安全衛生委員会			k
			入札参加指名選考委員会
			土壌病害対策委員会
各種活動の分担 (* 遺伝資源連絡委員)	NATEC対応		有機農業ネットワーク対応
	遺伝資源担当者		水稻直播ネットワーク対応
	北農会協力委員		上川地域道総研連絡会議対応

(2) 活動

業務委員会では、圃場管理業務、環境整備業務等を効率的かつ円滑に遂行するため、毎週木曜日に業務委員会を開催した。

図書・情報システム委員会では、定期刊行物の受け入れ、ホームページの管理更新を行い、定期作況報告等を随時更新した。IT資産監視システム(SARMS)への登録、ネットワーク非接続の端末情報の定期収集・報告ならびに外部記憶媒体管理に係る作業を行った。

安全衛生委員会を毎月開催し、安全衛生対策に関する意見交換、職場巡回点検、注意喚起などを実施した。

2) 諸会議

(1) 運営会議

場の管理運営に係る事項の協議を行う場として運

営会議を開催した。開催日は4月21日、6月18日、8月20日、10月29日、12月16日、2月17日の6回であった。

(2) 北海道農業試験会議に係る場内検討会

研究課題検討会議、秋まき小麦設計会議、成績会議及び設計会議に提出する試験研究課題について、それぞれ6月30日、8月22日、12月12日、2月2～3日に場内検討会を行った。

(3) 現地委託試験検討会議

農業改良普及センターへの委託試験(主に新品種選定に係る業務)検討会議を開催した。成績検討会議は11月26日(畑作・野菜)および11月27日

(水稻)に、そして設計検討会議は3月25日に開催した。成績検討は対面とWEBを併用したハイブリッド形式、設計検討はWEBのみでの開催とした。

3) 職員の研修

(1) 道総研職員研修

研修者名	研修名	研修期間	日数	場所
	新規採用職員研修	R7/4/8～10	3	札幌市
	新任主査級研修	R7/7/2～3	2	WEB
	道総研研究不正防止計画に基づく研究倫理研修	R7/5/8～5/30	-	eラーニング で実施
	道総研研究不正防止計画に基づくコンプライアンス研修	R6/5/1～6/2 10/24	-	自習
	安全衛生に関するトップセミナー	R7/8/27	1	WEB
	研究課題立案研修	R7/9/2～3	2	WEB
	専門研修Ⅱ（日本育種学会第148回講演会出席）	R7/9/10～11		札幌市
	化学物質管理者研修	R7/9/26	1	WEB
	新規採用職員研修B	R7/9/26	1	WEB
	会計研修	R7/9/30	1	WEB
	新規採用職員研修C（他分野体験・交流研修）	R7/10/20～24	5	余市町、 恵庭市
	令和7年度北海道職員「トップセミナー」	R7. 10. 27	1	WEB
	農業研究本部主催新任研究支援職員研修	R7/10/29～30	2	新得町
	女性活躍推進研修	R7/11/4	1	札幌市
	ゼロカーボン推進研修	R7/12/11	1	WEB
	専門研修Ⅱ（日本育種学会第149回講演会出席）	R8/3/21～22	1	水戸市

(2) 技術研修

研修者名	研修名	研修期間	日数	場所
	刈払機取扱作業安全衛生教育研修	5月27日	1	旭川市
	化学物質管理者研修	7月25日	1	旭川市
	甲種防火管理新規研修	8月28日～29日	2	美瑛町
	デザイン思考研修	8/21～8/22	2	札幌市
	車両系建設機械（整地等）運転技能講習	1/6～1/7	2	旭川市
	玉掛技能講習	1/19～1/21	3	旭川市

(3) 職場研修

研修等名	内容	講師	実施日	受講者数
交通安全情報の周知	北海道警察からの情報を全職員にメールで周知	総務課	随時	29
非常勤職員雇入時研修	事務手続き、行動とモラル（セクハラ等を中心）、安全な農作業、土壌病害虫汚染防止対策、刈払機	総務課、研究部長、水稻畑作G（管理）	4月11日、5月12日、7月3日、9月17日	31
e-ラーニング研修	コンプライアンス、ハラスメント、ダイバーシティ・インクルージョンについて	(株)ビズアップ総研	5月27日～2月27日	29
場内参観リハーサル	各グループの研究課題と圃場配置について	各研究G担当者	6月3日	20
情報セキュリティ対策・個人情報の取扱に関する研修	情報セキュリティ対策及び個人情報保護に関する研修	法人本部	6月16～6月30日	43
熱中症対策研修	熱中症発生のしくみと症状 健康管理と緊急時の措置	厚生労働省 e-ラーニング	7月29日	39
交通安全研修	車に潜む死角、かもしれない・だろー運転等	日本自動車連盟札幌支部	8月18日	26
化学物質管理者研修	化学物質の総合的な安全適正な管理・取扱等	教育研究機関化学物質管理ネットワーク理事長	9月26日	11
消防総合訓練	通報訓練、消火訓練、避難訓練、救命講習	大雪消防組合比布消防署	10月21日	42
労働安全衛生研修	転倒災害・腰痛予防	北海道産業保健総合支援センター相談員 千葉恒	11月5日	27
情報セキュリティ研修	情報セキュリティ対策について	法人本部	2月10～2月27	38

(4) その他研修

研修等名	内容	講師	実施日	受講者数
メンタルヘルスセミナー（管理職）	管理監督者の役割と対応	北海道医療大学 准教授 本谷 亮	8月6日	4
安全運転管理者研修	安全運転管理について	旭川方面安全運転管理者協会	10月8日	1
セカンドキャリア研修	シニア職員の役割等	(株)インソース 古木孝典	2月20日	1

(5) 学会発表等リハーサル

研究職員の学会発表やプレゼンを実施するのに先立ち、場内において事前の発表リハーサルを随時行った。

4) 表彰および学位授与

授賞日	件 名	受賞者	業 績
10/31	道総研職員表彰		30年永年勤続
10/31	道総研職員表彰（北海道知事賞）		にんにく種苗の安定的な増殖を可能とする新規ウイルス検査法の開発とウイルスフリー種苗管理技術の確立

3. 自己点検への対応

リストNo.	項目	報告件数等	備考
0	各機関へ直接寄せられたニーズ把握件数	0	
1	研究成果発表会・企業向けセミナーの開催件数	1	
2	研究会等の開催件数	0	
3	展示会等への出展件数	0	
4	研究報告書の発行件数	2	
5	技術資料の発行件数	1	
6	その他紙媒体発行件数	0	
7	普及組織との連絡会議等開催件数	8	
8	企業等へ訪問し広報活動した件数	3	
9	行政や企業等で活用された成果の数（農研本部で計数）	—	
11	設備使用の件数	0	
12	研究成果発表会・企業向けセミナーによる公表件数	12	
13	研究会における公表件数	0	
14	学会誌等の掲載件数	23	
15	研究報告書での発表件数	1	
16	学会やシンポジウム等での発表件数	13	
17	電子媒体による公表件数	0	
18	プレスリリース、定例報道懇談会の件数	2	
19	学会役員・委員件数	4	
20	技術相談の件数	98	
21	技術指導の件数	71	
22	講師等派遣の件数	6	
23	技術審査の件数	0	
26	研修会・講習会の開催状況（件数）	4	
26	研修会・講習会の開催状況（人数）	259	
27	研修者の受入状況（件数）	7	
27	研修者の受入状況（人数）	126	
28	連携協定先との事業の実施件数	0	
29	道関係部との連絡会議等の開催件数	8	
30	市町村との意見交換等の開催件数	2	
31	関係団体との意見交換等の開催件数	1	
32	道民意見把握調査の回答数	284	
33	出前授業の実施件数	0	
35	国内研修Ⅱ（外部講師招聘・受け入れ）	0	
36	専門研修Ⅰの派遣件数	0	
37	専門研修Ⅱの派遣件数	2	
38	道民向けイベントの開催件数	1	
38	道民向けイベントの延べ来場者数	289	
39	国際協力事業等への協力件数	1	
40	災害等に関係した技術指導件数	0	
41	災害等に関係した委員派遣件数	0	
42	ホームページ発信・更新件数	51	
43	メールマガジン発信件数	0	
44	フェイスブック発信件数	0	
45	その他電子媒体発信件数	190	
46	職場研修開催件数	36	
47	安全衛生委員会等開催件数	12	
48	機器設備の点検状況	随時	
49	その他職場研修	随時	
50	グリーン購入の金額	1,121千円	
51	視察・見学者の受入件数	36	
51	視察・見学者の受入人数	468	

注) 調査対象外の項目は除いた。
会議等の開催件数にはweb開催やメール会議となったものを含む。

本年報に記載した内容の無断転載、二次利用は固くお断りします。

令和 7 年度 上川農業試験場年報

令和 8（2026）年 1 0 月発行

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
農業研究本部上川農業試験場

〒078-0397 北海道上川郡比布町南 1 線 5 号

TEL 0166-85-2200 Fax 0166-85-4111 E-mail: kamikawa-agri@hro.or.jp